
奇運なる農耕民族A

古事記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇運なる農耕民族A

【Nコード】

N7288W

【作者名】

古事記

【あらすじ】

平凡なサラリーマンが異世界に飛ばされるというテンプレなお話。

迷宮？ 冒険？ 成功？ 彼の異世界生活はどのように彩られるのか…

どうぞご賞味あれ。

一話（前書き）

初めまして古事記です。

処女作なのでどうぞお手柔らかに…

一話

それは塔だった。思わず跪ずきそうになるほどの存在感をもち、見上げてみればどの高さまで伸びているのかはわからず、一生をかけても登りきる事はできない…と人に思わせる。

そんな塔だった。

そして、そんなものがこの現代日本にあるわけがない。

そもそも、こんなものがあつたら世界遺産に登録されるはずで、しない商社のサラリーマンである俺でも知ってるはずだ。というわけで、ここは日本ではないはずだ。

曖昧だって？

仕方ないだろうっ！

帰宅途中に、いきなりそれ何ルクス？ってな量の光にさらされ、目を開けば、全長何キロメートル？ってな塔が目に入ったのだから、こんな不確定な思考になってしまうのは無理がないはずだ。

とにかくっ、まずは情報が必要だ。

幸いにも町？の中にいるようで、話し声が石造りの壁越しに聞こえてくる。

たぶん、少し歩けばどこか人が多くいる場所にでるはずだ。

「はあ…俺にどうしろと？」

いや…な…

所々に露店が開き、人が行き交う賑やかな大通りに出れたんだが、聞こえてくる話し声や、行き交う人達に注意を向けると色々かわかった。

まず、話している言語が違うようで何を言っているのかわからない。次に、人種も違うようで肌の色や髪の色も違った。

これだけでも、八方塞がりってなわけだ。

だってそうだろう？

言葉が伝わらないので、まともな交渉ができないのだ。

しかも、さっきチラッと盗み見た感じでは貨幣も違った。

更に、青○のスーツに仕事道具十ノートパソコン入りのケース、という出で立ちはここでは相当怪しいっぽい。

鎧に剣を装備している奴や、怪しげなローブを着てる奴より人目を集めるとか、なんでだよ…

実際、どこかの小説やドラマのように、俺を助けてくれる奴なんていないんだろうな…

どちらかといえば『黒目黒髪なんて珍しいデース…お持ち帰りシマース』とか言われながら、人狩り組織の構成員に捕まえられ、奴隷みたいなものに堕とされてしまい、身ぐるみを剥がされる可能性の方が高そうだ。

まあ、そんな物があるかはわからないが、可能性はあるだろう。

はあ…本当に状況が絶望的すぎて嫌になる。

ただ、状況証拠からわかるのは、ここが異世界の可能性が高くて、このままだと遅かれ早かれ野垂れ死にするだろう事は、想像に難くないといった所だろうか。

「…嫌な予感しかしないが、あそこに行ってみるか…」

というわけで、例の塔の真下に着いた。

めっちゃ大きい…なんか感動した。

いや…やっぱ良いもの見るとテンションあがるわ。

ん？なんでそんな所に来たかって？

そりゃあ、観光目的だよ…

やはり、死ぬまでに一回くらい近くで見てみたいだろ？こんなにスゴイ塔なんだからさ…

ハハハ…

まあ、実際の所はちよつとした自暴自棄な気持ちと、なにか状況を打開する情報や道具があるかもしれないという、希望的観測から来てみたただけだ。

何もなければ、身振り手振りで財布の中の硬貨や紙幣を売る事に挑戦するか、人種も言語も違う誰かに頼み込んで助けてもらうしかないだろう。

うん：どっちも成功確率は低そうだな。
できればやりたくない。

それにしても、塔に関する嫌な予感は当たりだと思われる。

何故なら、剣と鎧で完全に武装した男が塔の中に入って行ったからだ。

しかし、俺には関係ない。

進むも地獄、戻るも地獄、ならば進んでみよう。ってな感じである。
だから、中に入ってみる事にする。

何：危険そうだったら引き返せばいいんだ。

それに、なんか入ったら良いことがありそうな気がするんだ：

フフフ：

「よっしゃ！ いっちょ行ってみるか！」

うん：なかなか見事な装飾が施された入り口から塔に入って、石造りの通路を進む。

すると、床に何らかの魔法陣みたいな模様が描かれた部屋に着いた。

どうやら、この部屋で行き止まりらしい。

あれっ？

あの完全武装の人はいずこに？

それに今更だが、塔に警備の人がいなかったのは何故だ？

「おおっ！！」

いきなり魔法陣らしき物が発光し始め、気付いたら巨大な扉が正面に現れた。

もしかして違う部屋になったのか？

しかも、来た道もなくなって引き返せないし…

「もしかして…これ詰んだか？」

なんとか精神を立て直し、進むことにした。

で…巨大な扉を開けたら、前と同じような石造りの通路だった。

違うところは、側面に変な模様が描いてあり、その模様が淡く光を放っている所だろうか？

不覚な事に、その光景が結構幻想的で、少しの間見惚れていた。

荘厳な外見の割に中身は繊細！

まさか、塔にギャップ萌えをくらわせられるとは思わなかったぜ…

そんな馬鹿な事を考えていたからだろうか？

後ろを見たら扉は消えており、行き止まりになっていた。

……

どうやら…不思議ちゃん属性も完備していたようだな…

などと、不安を紛らすために、またくだらない事を考えながら、通路を進んでいたら、T字路が前方に見えてきた。

ここは慎重に行くべきだと判断し、忍び足で通路の右側に身を寄せ、様子を伺ってみる。

「うおっ！」

突然だった。

T字路の左側から子供ぐらいの大きさの生物が、こん棒のようなものを振りかざしながら突撃してきたのだ。

突然すぎて、俺は情けない声をあげながら、そいつの攻撃を脇腹の辺りにくらう事しかできなかった。

「痛っ！」

しかし、なんとか痛みに堪えながら、攻撃してきた相手を即座に敵と判断し、その生物の側頭部を右手に握っていたケースで殴打できた。

きっと、即座に攻撃できたのは完全武装の人を見た時から、戦闘が起きるかもしれないと予想していたからだろう。

だが、そいつはよろけるだけでまだ生きている。

しかも、どうやら一匹だけではないようで、俺が一撃を加えている間にも、二・三匹の奴らに距離を詰められた。

だが関係ない。

ただ、俺に一撃をくらわせた奴を倒したかった。

だから奇声を揚げながらも、ケースを両手できつく握りしめ、先程と同じ箇所を思いっきり振るった。その攻撃は運が良かったのか見事に当たり、ボギィと嫌な音をたてて相手を吹き飛ばした。

しかし、その間にも間合いを詰めてきた奴らの攻撃が迫っていた。

脇腹が痛むが、なんとか体勢を崩しながらもその攻撃を、横っ飛びで避けた。

そこからは無我夢中だった。

奴らはゴキブリよりもしつこく、倒しても倒しても現れた。

俺はただただ…がむしゃらにケースを叫びながら振りまくった。

幸いだったのは、闘っている最中に脇腹の痛みや疲労に空腹といったものが消えていき、快感とともに力が漲ってきて、気分が高揚したことだ。

そのため死なずにすんだし、殺しへの忌避感もなかった。最初は何故だかわからなかったが、倒した奴らが光となって消えていくのを見た瞬間に確信した。

こいつらを倒したら体が回復し、快感とともに力が漲るのだということ。

それから泥仕合だ。

俺の叫び声や仲間の断末魔の悲鳴、それに戦闘音などにつられて、奴らが集まってくる。

そしてそれを俺が倒す。

その繰り返しだった。

どれくらいやったかはわからないが、T字路から動かずに体感で一週間以上は、それをやっていたと思う：

だが変化は訪れるもので、慣れたのかあるいはあの感覚のおかげかはわからないが、俺の殲滅力が上がったのだ。

そのため、倒しながら進むという暴挙ができるようになった。

ちなみに、その頃にはケースの掴む部分や外枠がボロボロになり、武器として機能しなくなったので、ノートパソコンと一緒に捨てる事にした。

勿体なかったが、命には返られないだろう。

今は、ゴブリン——余裕ができたので名前をつけてみた。外見は子供のような大きさと、額に小さな角が一本生えており、体色は緑・灰・赤褐色の内のどれかだった。装備の方はこん棒に腰布という有名な物で、外見と装備からこの名前に決定した。——から奪った二本のこん棒を両手に握っている。

このこん棒もゴブリンを倒したら光となって消えるのだが、奪った奴を倒さなければ普通に使えたので、ゴブリンから拝借して使っている。

ただ…今の格好は戦闘による激しい動きと、下部にゴブリンの攻撃が集中するため、スーツ…特にズボンの損傷が激しい。

実際、お又の部分も裂けており、酷く恥ずかしい格好となっている。

想像してほしい…

両手にこん棒…そして、又の部分が裂けたスーツ…えらくシユールな格好である。

うん…黒歴史がまた一つ増えた瞬間だった。

まあ、そんなシユールな格好で締まらないが、適当にゴブリンを倒しながら進む事にした。

途中に大部屋とか小部屋に、十字路などがあったが、ゴブリンが多くいるだけで何も見つからなかった。

しかし、一週間くらい進み続けたら、ゴブリンがよりつかない扉を発見する事ができた。

扉の中に入ると何かの魔法陣みたいな模様が床に描かれた屋だった。

案の定、模様が発光しだし、違う部屋に飛ばされる。

だが、俺はこれを一回経験していたので、たいした混乱もなかった。

なので、扉を開いて先に進む事にする。

ふと、そこで前との違いに気付く…

なんと！扉が消えなかったのだ。

試しに…と思い、扉から部屋に戻るとまた模様が発光しだし、前の部屋に戻ってこれた。

どうやら何時でもゴブリンの巣窟に戻れるようだ。

いや…全然嬉しくないんだが…

気を取り直し、探索を再開する事にして、代わり映えしない通路を進む。

ゴブリンがいないだけでしたが、最初の感動を返せと言いたい。

全く…こんな物だれが作ったのかねえ？

きっとこの塔を作ったやつは芸術性とか精神性が何処か欠落していると思う。

ゴブリンみたいな醜悪なモンスターに、変わり映えしない通路…きつと心も荒んでいて――

「うおおう！」

また、いきなりだった。

通路の床が崩落しだしたのだ。

しかも、床の破片と驚いた拍子に右手から滑り落ちたこん棒が、穴の底で何とも言えない音を上げながら溶けていったので、穴の底は桁違いな消化力をもった液体だと思われる。

俺は咄嗟に、崩落していない床の淵を掴めたので落ちないですんだ。だが、それで済まないのがこの塔のクオリティのようだ。床の崩落

と同時に向かい側の通路の側面も崩れ、そこから変な集団――ローブに杖を装備した。どこかの邪教徒のようなモンスターだ。――が出てきていたのだ。

しかも、何かぶつぶつと呟いており、気持ち悪い事この上ない。ただ、俺はその間に穴を命からがら登り終えることができたので、少しはそいつらに感謝をしよう。

しかし、邪教徒の方を見ると、彼らに感謝をした事をすぐさま後悔した。

何故なら火の玉のような物が、通路を埋め尽くすように浮いていたからだ。

「なっ!!」

そうして、邪教徒達が操作でもしたのか？

その火の玉の群がまるで俺を焼き尽くすと言わんばかりに、襲ってきたのだ。

一瞬で目の前は火の玉で埋め尽くされてしまい、どう足掻いても避けられないことを俺は悟れた。

咄嗟に反応し、顔だけでもガードしようと、腕を交差して床に屈んだ。

ドガァン!!

当たった瞬間に火の玉が次々と爆発し、俺は通路の後方に吹き飛ばされ、床に叩きつけられる。

後に残ったのは、俺の呻き声と肉の焼ける匂いに腕の鈍痛だった。

だが…まだ終わらせないと言うように、邪教徒達のぶつぶつ声が聞こえてきたのだ。

一瞬で頭が真っ白になり、逃げる逃げる逃げろと頭に警鐘が鳴らされた。

それほど俺にとって、あの攻撃の衝撃は大きかったのだ。

なんとか、体を動かし脱兎の如く元来た道を駆け出すが…

間に合わない。

あいつらは、もう火の玉を出現させている。

がむしゃらに、左手に一本だけ残っていたこん棒を向かってくる火の玉投げつける。

ドガアァン!!

後ろで爆発音がしたが振り返らずに走った。

ただただ走った。

――

どうやら、記憶はないが逃げ切れたようで、いつの間にか俺はゴブリンと闘っていた。

しかも、骨が見えて指が何本か失くなり痛々しかった手や腕、体の酷い火傷なども治っていた…

なんだか、狐に化かされたような感覚だが、あの恐怖の記憶が現実だと言っている。しかも厄介なことに、あのゴブリンが近づかない扉に入り、邪教徒達が出現した通路に行こうとすると、あの記憶が蘇り、体が震えてしまい、遂に部屋に入れなくなってしまった。

どうやら一連の記憶がトラウマになったようで、どうにもできない…

本当に情けないものだ。

だが、ゴブリンを倒せば生きることだけはできるのだ。

それに、体を動かしていればよいなことは考えないですむ。

そんな逃避じみた考えとともに、俺の長い長いゴブリン駆除生活は始まったのだった。

二話（前書き）

うーん…読むのは楽なのに書くのは難しい…これが真理か…

二話

ブチッ

グチュッ

ドシャッ

ゴブリンが壊れる音と共に、無言で体を縦横無尽に動かし、大部屋中に群がるゴブリンを殲滅する。

そして、その勢いのままに通路に群がるゴブリンをも駆逐し、また大部屋に溜まったゴブリンを殺戮する。

この動作をスムーズにできるようになってから、もうどのくらい続けたらいいだろうか？

飲まず、食わず、寝らず、休まず、ただ殺し続ける。

どのくらい続けたらいいだろうか？

もしかしたら十年？二十年？

わからない。

ただ、言える事は俺が戦い続けたって事だけだ。

最初は生きるために。

簡単に倒せるようになってからは自暴自棄による八つ当たりによって。そして、最後はなにも考えられず、呼吸をするかのように殺し

回った。

もしかしたら狂っていたのかもしれない。

ただ…殺すことだけに集中すれば、なにとも忘れられたから…

天野 徹 (アマノ トオル)

年齢…34歳(当初は22)

身長…175cm(変わっていない)

体重…70kg(当初は60kg)

外見…黒目黒髪でさっぱりした好青年で、性格は善人ではある。

今は、迷宮での戦闘により全体的にゴツくなり雰囲気は鋭くなっている。

ただ、外見年齢は変わっていない。

何故ならゴブリンから吸収した力のおかげである。

しかし、スーツはよりボロボロになり、こん棒は彼の力についていけなくなってしまったので、ゴブリンとの戦いは格闘戦主体となった。

そのため、酷く貧相な格好になってしまっている。

現在地…塔型迷宮【エンディアル】一階層

迷宮探索時間…約106000時間

ゴブリン撃破数…後少しで約50000000匹

「は？」

それはいつものように殺戮を行っていたら唐突に起こった。

ゴブリン達がいきなり逃げ出しはじめたのだ。

言葉にするとこれだけだが、今までどんな酷い殺し方をして、俺には関係ないとばかりに群がって来た奴らが、一目散に逃げ出す光景は俺にとって、とてつもない衝撃だった。

「クソがっ！待てやゴラァー！！」

だが、すぐに再起動する…と同時に怒りを感じた。
なんというか、子供の時の自分より弱いと思ってた奴が、反抗してきた時の理不尽な怒りに似ているはずだ。

だから、こんなに荒っぽい言葉になってしまったのだ。
実に何年ぶりのまともな発声がこれとはなにか微妙だ…

「はあ？」

まあ、あんな暴言を吐いたがゴブリンどもが止まらないことなどわかっていた。

だが、止まったのだ。

一目散に逃げていたゴブリンたちが、一気にピタッと。

だから、また呆けた。

「どういうことだ？」独り言を呟くと同時に思考する。

ゴブリンが命令をきいた？殺しまくったから？

うん…考えてもわからんか…

だが…使えるかもしれない。

俺は、何年ぶりのかまともな思考で閃いた想像を実行に移す事にした。

「ゴブリン共おお！！殺しあええ！！…」

その低い声は見慣れた部屋に、やけに寂しく響いたような気がした。

今、俺の前には強化されたゴブリンが数匹並んでいる。

どうやら、ゴブリンも俺と同じで倒した相手から、力を手に入れられるらしい。

手合わせして、強くなったのがわかったのと、強化ゴブリンを倒したら普段より快感が強かったために、そう結論づけられた。

ここまでは俺の想定通りだ。それとだ…殺しあっている最中に、どこまで複雑な命令をゴブリンが聞けるかの検証を、思いつきでして

みた。

で、わかった事は：

理不尽な命令はやろうとするがやれない。

例としては、空を飛べっ！と命令したら、一斉に跳びはねた事だろうか？

この時は、あまりの可笑しさに久しぶりに笑ってしまった。

複雑な命令がやれる。

百メートル歩いて戻って来いとか、ゴブリンを二匹倒して来いとか、腕立て伏せを十分間しろっ！など：ダメもとで言ったら達成して来た。

つか：正確な時間とか距離とかをわかってるのはなんでだ？

個人命令と集団命令ができる。

お前だけ腹筋をやれっ！とか言ったら、そいつだけがやり始めた。集団命令の方は殺し合えや飛べと言った時の行動により、証明されているだろう。

命令を口にださずに念じるだけでもゴブリン達は命令をきく。

そこの緑ゴブリンだけ腹筋をやれ！と頭の中で念じたらやり始めた。

こんな所だろうか？

だが、日本語を理解しているようだから、日本語を喋れと命令した

んだが、どいつも喋れなかった。

もしかしたら、なにか俺の意思みたいなものを感じとっているのかもな…

つか、どうでもいいけど喋り相手が欲しかったなあ…
なんか正気に戻ったからか、すごく寂しいんだよ…

ただ…ゴブリンは今まで敵だったし、外見的にも全く癒されないの
で、もし話せてもこの寂しさは、紛らわせられないかもしれないがな。
まあ…その寂しさを紛らわすために精力的に働いていたら、案外速
く強化ゴブリンが溜まってきたので、そう悪い事ばかりじゃないの
か？

「よっしゃ…じゃあ第一部隊から一時間ごとに突入しろ…
んで、探索期間は一週間…
ああ少しぐらいなら期間はずれてもいい…
それと…めばしい物を見つけたら持って帰ってこいよ」

強化ゴブリンと手合わせをした日から、体感で十日ほどたったころ
だろうか？

俺は計画を実行に移していた。

計画名

【ゴブリンを使って楽々ルンルン大作戦☆★】

概要

ゴブリンを強くして、代わりに探索させちゃおうぜ！

ドンドン☆パフパフ♪

探索部隊編成

赤ゴブリン×2 緑ゴブリン×2 灰ゴブリン×2の6匹で1部隊編成である。

ちなみに、鍛えて分かったのだが、能力的に赤ゴブリンは筋力や体力が高く、緑ゴブリンは平均的で、灰ゴブリンは速さと器用さが高かった。

そして、一匹一匹が一万匹ぐらいの中から生き残った精鋭であったりする。

突入部隊数…10部隊

探索期間…一週間

以上が計画の全容である。

後は、ゴブリンを鍛えながら一週間待つわけだが、暇だ。というわけで、俺は俺で一階層——気分的にゴブリンの巣窟をそう呼ぶ事にした。あながち間違いいではないだろう——の探索を試みる事にした。

「おっしゃ！ゴブリン共っ！探索すっぞー！」

で…人海戦術も交えて探索して見たんだが、色々と見つかった。

取得アイテム

ダガー×20

木の弓×10
木の弓矢×100
革の鎧×10
革のブーツ×10
ブレスレット×1

殆どが、ゴブリン達が見つけた隠し部屋から出てきた物だ。

ただ、防具はゴブリン用の装備っぽくて、俺には装備ができなかったし、随分前に捨てた筈のノートパソコン＋仕事道具がなくなっていたのはなんでだ？

はあ、諦めるしかないのかもな…

しかし、この中でも一番貴重そうなブレスレットなんだが、探索中に少し気になって、ゴブリン達に『お前らってどこで生まれたんだ？』って聞いたたら、なんか案内をし始めたのだ。

で…付いて行ってみたら、突然ゴブリンが壁の中に消えた！

どうやら俺には通れない道？みたいな物があるらしい。

仕方がないので、ゴブリンにこの先を探索して、めばしい物があつたら取ってこい。と命令を出し、待っていたんだが…

その時に、このブレスレットをゴブリンが持ってきたってわけだ。

そのブレスレットをゴブリンに嵌めさせたりと、色々と実験を行い、危険な物ではなさそうだと判断できた。

なので、取ってきたブレスレットを嵌めてみようと思い、腕に近づけてみる。

カシュッ

腕に近づけた瞬間に、そんな擬音を発しながら俺の腕に合うように変化して、ピッタリと嵌まってしまった。

「やっべえー！！なんかテンション上がるし！」

ゴブリンによる実験で予想していたが、少し興奮してしまったのは、男として仕方がない事だろう。

実際、ブレスレットに認められた！みたいな感じで嬉しいじゃん…

そんなことを思いながら、何ができるのかを早速試してみる事に…で、振ってみたり念じてみたりと、色々試していたらブレスレットが発光し、ゴブリンが現れた。

びっくりしたが俺自身には、なんの変化もなかったもので、どうやらノースクでゴブリンを召喚できるみたいだ。今までは、大声を出しゴブリンを集めて、鍛練という名の殺し合いをさせていたのだが、ブレスレットで召喚できるようになったために、作業効率が大幅に上がった。

うん…俺が嬉しい悲鳴をあげているすぐ横で、ゴブリン達も悲鳴をあげている事を気にはいけないだろう…

それと、ブレスレットを捕ったからなのか？

確実に、一階層のゴブリンの出現数が減って一階層が落ち着いた。

ただ：ゴブリンはまだ出現するので、あの部屋のような場所が他にもあるのかもしれない：

しかし、いくら捜してもこれ以上の隠し部屋は見つからなかったので、既に半ば諦めている。

また、その他の見つかった武器や防具は、親衛隊ゴブリン——新しく鍛えた中で能力が高そうな奴を適当に集めただけ——に着けさせている。

そんな事をしていたら、待ちに待ったゴブリン部隊が帰ってきた。

探索結果

帰還部隊数…7部隊

総ゴブリン数…28匹

取得アイテム

小石×1006

ローブ×6

木の杖×5

薬品？×15

巻物？×11

古びた本×1

ネックレス×2

指輪×1

結果はこんな感じだった。

この中で興味深い物は本だった。
開いたら頭に言葉が、突然浮かび上がったのだ。
そして、浮かび上がった言葉を唱えてみたんだが…

突然の頭痛…

それが一気に俺を襲ったのだ。それと共に解るのだ…全てが。

アイテム解析結果

☆…一点もの又はレア品 五つ星まであり。

基本的に持っている効果としては、劣化しない+その品物だけの特殊効果などが付加されている。

また、形状は装備者に合わせて変化する。などe t c…

★…呪いつき

効果が反転し、外せなくなる。

○…一点もの又は、レア品への特殊コメント。

□…効果

全知の書☆5

(知りたいか?ならば刮目せよ…)

【ユニークスキル…全知の眼LV1の取得 使い捨て】

クイーンブレスレット『鬼属の祝宴』☆4

(それは母なる腕輪 全ての源 さあ生に感謝せよ!!)

【鬼属を生み出せる。永久品】

成長促進のネックレス

【あらゆる能力が少しだけ伸びやすくなる】

力のネックレス★

【力が少し強くなる】

収納の指輪

【100kgまでならなにを入れても大丈夫！なお、入れた物は劣化しない】

痺れ薬×5

【この薬を浴びた者か飲んだ者を、一定時間痺れさせる。】

毒薬×4

【この薬を浴びた者か飲んだ者を、毒状態にする。】

爆発薬×3

【衝撃を加えると半径3メートルくらいの爆発が発生】

筋力促進剤×2

【この薬を使うと、一定時間筋力アップ】

敏捷促進剤

【この薬を使うと、一定時間敏捷アップ】

解呪の巻物×3

【一定の呪いを解ける】

強化の巻物

【使うと装備品を強化できる】

劣化の巻物×2

【使うと装備品がランダムで劣化する】

生命石へ小×1006

【生命力が詰まった石、握り潰せば吸収される。】

こんな感じで、他にめぼしい物はなかった。

それよりも、これらのアイテムを一瞬で把握したからか頭痛がやばい。

しかも、目に入ってきたゴブリンや塔のせいで、ゴブリンの能力や塔の機能などの膨大な情報が送り続けられており、耐えがたい頭痛が俺を襲う。

「俺を…守れ…」

ゴブリン達に対して、なんとかこの言葉を絞り出し、俺は意識を手放したのだった。

三話（前書き）

アクセス解析してみました。

この恥作を読んでいる人がいるようで嬉しいかぎりです。

だが…なんだこの気恥ずかしさは？

ハッ！？まさかこれが恋？

三話

『能力限界によりユニークスキル…全知の眼の能力の一部凍結を完了しました。』

そんな声が頭の中で響いたような気がした。

「あれ？ここはどこだ？」

ああ…思い出した。

本を読んで周りを見たら急に頭が痛くなったんだったな。

うん…今は痛くないな…それよりゴブリンの顔を寝起きから見るのはなんともいえんな…

「うおっ！」

ゴブリン達を見ていたらなんか情報が浮かんできた。

それと同時に気絶する前の情報も浮かぶ。

…どうやらこの塔の中では、俺のいた世界と理が違うらしい。
しかし、塔の中の理の情報を色々と探って整理して見たんだが、
なんかゲームの設定みたいだ…

もしかしてゲームの中だったりしてな？

うん…否定する材料がないから笑えない…

ちなみに一番強いゴブリンを、塔の理で簡単に表してみるとこうなる。

赤ゴブリン

LV6

限界LV15

STR24

VIT19

INT14

SPD16

DEX15

MID12

スキル

同族殺しLV1○

虐殺者LV1○

力の加護LV1◎

状態

徹の支配下

うん…詳細は俺にしかわからないな…

まあ、雰囲気であってくれっ！

次に俺だ。

天野 徹

LV20

限界LV28

STR26

VIT24

INT38

SPD33

DEX32

MID28

スキル

鬼殺しLV3○

鬼王LV1☆

弱者への威圧LV3○

虐殺者LV3○

一騎当千LV3○

無眠無休LV3○

硬い体表LV3◎

体術LV1○

狂化LV3◇

力の加護LV3◎

技術の加護LV3◎

速度の加護LV3◎

魂吸収効率上昇LV3○

奇運LV1☆

全知の眼LV1☆

状態

恐怖

こんな感じだった。

なんか、この数値が高いのか低いのかはわからないが、最低でも常人の四倍の身体能力はあるみたいだ。

それに、INTが限界まで育っているみたいなんだが、全知の眼というスキルのためだろうか？

それにしても、スキルの名前とか効果が物騒過ぎるなあ：

しかし、この数値とスキルが体感で十年以上の虐殺の成果なんだろう…

感慨深いような…日本人としては物騒すぎて、なんとも言えんなような感覚だ。

ただ…状態の恐怖ってなんだ？

ほうほう…殺されかけた時のトラウマのことみたいだな…
ん？…どうやら解呪の巻物で改善できるらしい。

やってみるか。

で、巻物を使ってみたんだが…

なんか…めっちゃ気が楽になったし扉にも近づけるようになった。

凄いわ…解呪の巻物。

次は、アイテムの解呪もしところか。

ふむ…一段落ついたしどうするかな…

よしっ！目標をきちんと決めるか…

うーん…地上への帰還と、生きていけるだけの能力の習得、それと貴重そうなアイテムの取得って感じにするか。

幸いにも価値が高いものは塔の中に多くありそうだな。

まずは、二階層の攻略をするべきだな…

実際は、ゴ布林達に任せる事になるんだがな…

罵りたければ罵ればいいさ…

恐怖は消えたんだが、やはり俺は慎重に行きたいんだよ！

ゴ布林探索部隊第二陣

探索期間…一週間

突入部隊数…20部隊

編成は前回と同じ6匹編成で、前回の生き残りをリーダーに据える事にした…

ん？…ユニークスキル持ちのゴ布林が1匹いるし！

なになに…

鬼才LV1☆…全ての能力が大幅に成長しやすくなる。スキル発現

率も大幅にアップ！

幸運LV1☆…全ての行動が良い方向に向かう。
ドロップ率が大幅にアップ！

羨ましすぎる…なにこのチートゴブリン…

俺なんか奇運だぞ…凄く殺したいんだが…

いやいや…落ち着けよ俺っ！その考えはさすがに物騒すぎるだろう…

そうだな…優秀な手駒ができたと考えればいいんだ。
うん…そうしよう。

よしっ…じゃあコイツを部隊のリーダーにして、成長促進のネック
レスも着けてやってと…

それじゃあ！逝ってらっしゃい。

俺？俺は残ったゴブリンを鍛えるという重要な仕事があるのだよ！

ハッハッハッ

なんて…冗談は置いて…

実際の所は、生命石の吸収＋自己鍛練と、無抵抗のゴブリンの殺戮
＋アイテムの検証を一週間しようと思ってる。

それにしても、一週間後が楽しみだな：

今度はどんな物を取ってくるのかねえ？

――

遂に、ゴブリン部隊が帰ってきた。

探索結果

帰還部隊数：20 部隊

帰還ゴブリン数：105 匹

取得アイテム（鑑定済みかつ、めばしい物のみ表示）

【 効果（説明済みは除外）

『 ☆品の銘

生命石〈小〉×3653

俊敏の指輪

【少しでも俊敏になれる。】

収納の指輪×2

成長促進のネックレス
力のネックレス×2

技術のネックレス

【少しだけ器用になる】

魔力のネックレス

【少しだけ特定のスキルの威力があがる】

2階層の地図

【2階層の地図：罾も隠し部屋も表示されていない】

能力上昇の秘薬×2

【ランダムで能力が1上がる】

即死薬

【中の液体を飲んでも、触れても即死する】

ポーション
回復薬×3

【色々と回復してくれる万能薬】

解毒薬

【毒状態を治す】

解呪の巻物×4

強化の巻物×2

付与の巻物

【ランダムで装備に魔術的付与を行う】

転移の巻物

【同じ階層のどこかへ転移させられる】混乱の巻物×2

【使用者が一定時間混乱する】

鑑定の巻物×3

【アイテムを鑑定できる】

炎の魔術書

【アクションスキル…炎の矢を習得 使い捨て】

癒しの魔術書

【アクションスキル…治癒を習得 使い捨て】

木の杖『深緑の樹杖』☆1

(感じる！全てを包み込む大樹の癒しを)

【治療系統のアクションスキルの効果二倍＋能力成長率上昇】

以上だ。

それより、欠損はあるが全部隊が帰還してきたのが一番の驚きだ。

慣れたのか？それともチートゴブリンの幸運のおかげだったりしてな…

しかし、あのチートゴブリンがいつの間にか一番LVが高くなってたんだが…

まだ…俺のほうが断然強いが、反逆とかしないよな？

いや…心配してもしようがないな…それに、そうゆう兆候をみせたら、切り捨てればいいんだ。大丈夫だろう。

それじゃあ…取ってきた装備品を装備させてやって——ステータス上昇系統の消費アイテムと装備品の強化をするアイテム以外はゴブリンに渡している。危険な物は取り扱い方を命令して渡しているから大丈夫だ。それと、ゴブリン達が帰ってきた、普通の装備品は大きさにゴブリン用だったので装備させた。——損耗した部隊にゴブリンを補充し、怪我をしているゴブリンに覚えた治癒を試してみる。

うん…普通に怪我が跡形もなく消えた。
このスキルすごいわ。

だが、ゴブリンを倒しても回復できるから意味がない気がするんだが…

うん?…どうやら吸収した力が回復に回されて回復されるから、吸収した力のロスが大きくなるみたいだ。

なので、スキルを使った方が効率よく力が吸収されるみたいだ。

——
あらかた確かめる事も済んだので、またゴブリン達を投入する事にした。

休み?…2時間程度は設けてあげたし、入れ替えた方がいい奴は入

れ替えたから大丈夫だって。

ゴブリン探索部隊第三陣

内容は前回と同じだ。

ちなみに、ゴブリンは全体で180体を維持している。その中の120匹を突入部隊に当てている訳だ。

これ以上増やすのは管理が大変だし、なんか知らない所で反乱されそうで怖いので、増やすつもりは今の所はない。

それにしても、ゴブリンへの対応がいつかマンネリ化しそうで怖いな…

ゴブリン達に命令を出し過ぎて、傲慢な人間になってしまい、地上に帰ってもウザがられながら、生きていくしなくなってしまう…

うん…そんな未来が確かに見えたような気がする。

実際に、ゴブリン達に命令を出し、ゴブリン達が行動に移す姿を見るのは、なにか俺の支配欲的な物を満たしているようで、気分がよくなる時があるから、気をつけないといかな…

まあ…やる事がまた増えたし、まだ大丈夫だろう。

やる事とは、新しく覚えたスキルのLV上げにスキルの習得だ。

何体かのゴブリンが新しくスキルを覚えていたので、眼でみたら習得方法と鍛え方がわかったため、覚えられた。

ただ…ユニークスキルだけは、先天的な要因や特殊なアイテムが必要なようで覚えるのは無理みたいだ…

鬼才と幸運欲しかったな：

――

もう、十回以上も二階層に探索部隊を派遣したため、色々あった：

まず、チートゴブリンがボブゴブリン――決してホブゴブリンではないっ：最近まで作者がホブゴブリンの名称をボブゴブリンだと思つてた事なんて関係ないっ！：かもしれない：

外見はゴブリンを全体的に大きくしたただけだ。そして、覚えていたスキルは引き継いだようで、LVと限界LVが1に戻っていた：ただ：それでもボブゴブリンの方が強いみたいだ。たぶん、ゴブリンLV100≦ボブゴブリンLV1こんな感じだろう――に進化したり、ボブゴブリンを見たおかげで、ブレスレットからボブゴブリンを召喚できるようになった。

チートボブゴブリンの方が召喚したボブゴブリンより大幅に強かった事から、進化した奴の方が強くなると思い、残りの179匹のゴブリンに無抵抗のボブゴブリンを虐殺させて進化させた。

実際に、進化したボブゴブリンは、召喚したボブゴブリンよりも数値が高かったし、強かった。ちなみに、ボブゴブリンのドロップアイテム――生命石、剣、盾、本、巻物、薬品など。俺が倒した時に出了た装備品は、普通に大きかったので倒した者にあった装備品がドロップするらしい――は美味しくいただかせてもらいました。

それにしても、大量のアイテムと良質な配下が入って笑いがとまらない：

俺…鬼より鬼畜すぎるな…

んで、180体のボブゴブリンの良質な装備品と回復系の消耗品が有り余るほどに揃ったし、俺自身の実力も相当上がったので、二階層に拠点を移そうと思う。

さらば1階層よ…

ここまでの探索成果（表示は俺が役立つと思ったもののみ。中にはもう使った物もある。）

収納の指輪×27
強化の巻物×11
付与の巻物×7

祝福の巻物×1

【アイテムを一段階上のアイテムにする】

能力上昇の秘薬×9

LV上昇の秘薬×2

【全ての能力値を1上昇させる】

炎の魔術書×2

雷の魔術書×2

【アクションスキル…雷の矢を習得 使い捨て】 治癒の魔術書×3

解毒の魔術書×1

【アクションスキル…解毒を習得 使い捨て】

解呪の魔術書×1

【アクションスキル…解呪を習得 使い捨て】

身体強化の魔術書×2

【アクションスキル…身体強化を習得 使い捨て】

体術の奥義書×2

【体術系統のアクションスキルをランダム習得（能力値により変動）
使い捨て】

槍術の奥義書

【槍術系統のアクションスキルをランダム習得（能力値により変動）
使い捨て】

剣術の奥義書×4

【剣術系統のアクションスキルをランダム習得（能力値により変動）
使い捨て】

赤の永久書☆1

（熱をもって 教えとなす）

【アクションスキル…炎の矢、炎の壁、炎の風を習得可能 永久品】

木の杖『深淵を知る樹杖』☆1

（常闇に 堕ちては見ぬか？ 我が敵よ…）

【攻撃時に恐怖、恐慌、混乱、盲目などの状態異常を起こす】

木の杖『焼け焦がす炎天』☆1

(それは灼熱 炭化せよ)

【炎系統のスキルの効果が二倍アップ】

ロングソード『血彩色の刃』☆1

(紅を求めよ 渴いて黒ずむ前に)

【一撃死の確率大幅アップ＋敵攻撃時に体力回復】

ロングソード『真空の断刃』☆1

(断ち筋が見えぬか？ では狩ってやろう)

【アクションスキル…真空剣の習得＋切れ味アップ】

ダガー『闇夜の濡れ刃』☆1

(眠れ 常闇と共に)

【攻撃時に猛毒の状態異常を起こす】

ラウンドシールド『反射の守護盾』☆1

(さあ放て 倍にして返そうぞ)

【敵の攻撃の防御時に相手の攻撃を反射する】

ローブ『歓喜の宴』☆1

(泣いて喜べ ごちそうだ)

【アイテムドロップ率大幅アップ】

ローブ『無垢なる笑顔』☆1

(守りましょう いつまでも)

【状態異常を全防御】

ちなみに☆品はほとんど幸運もちのチートゴブリンの成果である…

羨ましい…

四話（前書き）

うーん…この小説は面白いのか？

疑心暗鬼だ…

四話

あれから装備を整え、とうとう二階層にきた。そういえば、俺を火だるまにした邪教徒のローブを剥いでみたら外見はゴブリンであり、眼が青色だったのが、ただ一つの違いだった。（個体名称をゴブリンロードとした。ついでにブレスレットで召喚できたので部隊に組み入れた）ゴブリンロードのドロップアイテムは生命石、巻物、薬品、本、杖、ローブなどだった。この中で生命石だけは毎回ドロップしており、（ボブゴブリンの時も毎回ドロップしていた。）他に二階層に出現したモンスターはゴブリンとスライム——落とし穴の液体がそうだった。遠距離スキルで嵌め殺しをした。遠距離からの飽和攻撃サイコー！ドロップ品は生命石に薬品だった。——のみで、えぐい罠も結構あったが、探索部隊にいたボブゴブリンが罠解除と罠看破のスキルを習得していたので罠に嵌まる事はなかった。もちろん解除の仕方を身振り手振りで教えてもらって俺もスキルを習得した。後、隠し部屋などはもう探索済みだった。

ボブゴブリンマジ優秀。

三階層へ行く部屋があったのでボブゴブリン部隊を突入させる事にする。

探索部隊詳細

突入部隊数：30部隊

部隊編成：赤ボブゴブ×2 緑ボブゴブ×1 灰ボブゴブ×1
ゴブリンロード×2の6匹編成にした。総部隊数は45部隊で15部

隊が緑ボブゴブ×2 灰ボブゴブ×2 ゴブリンロード×2の編成である。

探索期間…一週間

こんな感じで突入させた。

待つ間はゴブリン達の鍛練＋自己修練だ。てか、生命石が溜まり過ぎて俺の消費が追いつかん…チートにでもやるか？

あと、なんかスキルのおかげで休息を挟まずに動き続ければ続けるほど調子が良くなるし、能力を確認できるので最近LVを上げるのが楽しくなってきた。

あれっ？楽しくて気持ちいいって、実は最高の暇つぶしじゃね？

そんなことを考えながら、LV上げに夢中になっていたらいつの間にか部隊が帰ってきてた。

探索結果

帰還部隊数…30部隊

帰還ゴブリン数…180匹

部隊の損耗がなかったので、はっきり言って愕然とした。確かに装備も整えさせたし、色んなスキルも覚えさせた。だが出来過ぎだ。

まあいいことなんだけどな…

それと派遣した部隊のゴブリンより、残して鍛練させたゴブリンの方がLVが上になってた（チートは別）。

んで、取ってきたアイテムを鑑定してみたんだが：剣とか盾とかのアイテムの質が明らかにボブゴブリンの落とすアイテムより低い。中には☆品もあるから無駄とは言えない：が確実に3階層のモンスターよりボブゴブリン達の方が強いんだろう。

この事から派遣部隊数を減らして、残って鍛練をするゴブリンを増やした。――上がっちゃえって？油断大敵だぞ諸君！――残した中にはあのチート（成長促進系の☆装備とドロップ率が上がる☆装備を着けさせている）もいる。

派遣して鍛練しての繰り返しを5週間くらい繰り返していたんだが、なんとチートが片言ながら日本語を喋りはじめたのだ。どうやら俺の命令や独り言から学んだみたいだ。

さすがにチートは違う：

チートと話してみたんだが人間の大人並の思考能力はあるみたいだ。（ただ自己の表現とかは経験がないので、まだ無理っぽい）それで色々と話してみても分かった事がある。

ゴブリンは俺の事を本能で従うべき存在だと見なしている。

俺の命令は何故かは知らないがわかる。細かく聞くとやはり意思のようなものを感じ取っているようだ。

ボブゴブリンには感情（喜怒哀楽）がある。何回か☆品を持ってきた

た時に褒めた事はあったんだが、反応が無かったのでそんな高度な思考や表現はできないものだと思ってた。チート自身は褒められると嬉しかったのを覚えているがゴブリンだったので、無反応だった。と言っていた。で、ボブゴブリンになってからは王の前ではしゃぐのは無礼だからだそうだ。——てか王って言われても実感わかねえし：まあいやな気分ではないな——それと本人はそこまで気づいてはいないが俺がチートを特別に扱うのは嬉しいっぽい。なんかいいらしくかわいいと思ってしまった。で、チートがきちんと思考できるようになったのは、ボブゴブリンになってからであり。それまでは、明確な思考というものはなくただ従うだけだったらしい。もしかしたら、これから他のゴブリン達も表現豊かになるかもしれない。なんか怖いような楽しみなような感じた。まあ、ゴブリンは消耗品だと自分にいい聞かせてはいるから情が沸く事はないだろう。

話して分かった事はこんな感じだった。ん？全知の眼つつゝスキルでそんな事は分かってたんじゃないかって？いやいや：な〜んか浮かんてくる情報が曖昧なんだよな：特に☆スキルとか☆品に塔の事とかを調べて見るじゃん。断片的な情報しか思い浮かびません。まじ名前負けしてる☆スキルだわ。まあ、役には立ってますが：

チートが羨ましいっす。

で、今は、溜まっていた生命石をチートと一緒に吸収しながら日本語を教えている。つっても、ただ適当に喋っているだけなんだが：案外面白い。なんというか、少しずつ表情の変化とかがわかるようになってきたし、チートの受け答えに俺への無垢な信頼というか敬愛というかわからんが、そういうものが見えてこそばゆい：が悪くない。それが、たとえばスキルによるものだったとしても、やはり会話をし相手を理解するのはいいものだ。

チートが日本語をある程度習得して、派遣の繰り返しを七を越えたころだろうか？チートとゴ布林ロードが進化した。チートの方の外見は、人ほどの大きさになって、額中央から出てきていた角が引っ込んで、額の側面からゴブリンの時よりでかい角が二本でできた。（個体名称はハイゴ布林とする。灰ゴ布林と被ってる？キニスンナ：）あゝあと、チートは♀だったようだ。進化した事によって体の変化が強調された事で分かった。敢えて言っておこう、ゴブリンの顔面はいくら愛着が湧こうと凶器です。ここまで言えば察せるだろう？ゴ布林ロードの方は、ボブゴ布林を華奢にして、青い瞳を持たせたって感じの外見だった。（個体名称をボブゴ布林ロードとする。）んで、前と同じく他のゴ布林にも進化して貰うために、ハイゴ布林を召喚して倒させた。召喚したハイゴ布林には知性があるようで覚悟してたんだが、少し罪悪感がでた：ゴ布林ごめん。そうして進化させたんだが、ほとんどのボブゴ布林が二本角のハイゴ布林にならなかった。どうやら優秀な個体しか二本角にはなれないらしい。（召喚したのも一本角の方が圧倒的に多かった。）ついでに、ボブゴ布林ロードにもアクションスキルによる大規模攻撃でハイゴ布林を倒させていたら、二週間程度でまた進化した。外見はハイゴ布林を華奢にして青眼を付けただけである。もちろん二本角もいる。（個体名称をハイゴ布林ロードとする。能力的には魔術的なスキルを追加で多く覚えており、INTとMID特化型だった。）

部隊全てのゴ布林を進化させたので3階層に進む事にした。

自分でも慎重すぎる気がするが、そこまで、この塔を出たいとも思わなくなってきたので、気長に構えている。

この思考に至った理由としては、話相手ができたのが大きい、それに、塔を出ても知り合いもないから出る意味がわからなくなった……ただ、美味しいものと日の光が恋しく、久しぶりに性欲の発散はしたいから目標は変わらん。

3階層は2階層よりも通路も部屋も全体的に広くてなんか部屋とかの見栄えがよかった。出現モンスターは、ゴブリンほどの大きさで狼の頭をしたコボルトと、でかい吸血蝙蝠・バット、でかい犬・ハウンドドッグ、ゴ布林ロード、ゴ布林などだった。ほとんどがLVが3以上であり、コボルトとバット、ハウンドドッグは普通に襲って来たので、鬼属とは違う種属らしい。こいつらも殺しまくれば従うようになるのか？まあ、めんどくさいからやらんけどな……

んで、罨解除＋探索↓扉発見↓部隊派遣↓鍛練開始の順番でやり慣れた行動をする。派遣を10回くらい繰り返したところで4階層に上がることにした。チートが進化しなかったのが残念だ……が、☆品や能力アップ系のアイテムが結構溜まってきているので満足している。それと、念願のアイテムをハイゴ布林ロードが落とした。

帰還の巻物

【塔から脱出できる】

見つけた時はすごく心が揺れた。だが、まだ使わないことにした。なんというか、めっちゃくちゃ有用なゴ布林達を地上に連れて帰りたいと思ってしまったのだ。

幸いにも此処には不思議なアイテムが沢山あるため、帰還を何回でも使えるようにする魔術書やゴ布林達を隠す事ができるアイテムなどが上層にあると思うので、帰還しない事にする。実際、塔に関する断片的な情報にもそんな情報があった。

まあ：どうにでもなるさ。

4階層の出現モンスターは、前の階層のモンスター＋ゴブリンに、人ほどに巨大な毒蛇…スネークに、骸骨のモンスター…スケルトン―形状は人型や獣型など様々―に、でかいスライム…ボスライムなどだった。で、四階層も例によって例の如く全体的にでかくなっていた。

それにしても、スケルトンは怖すぎる。通路の陰から突然現れた時は思わず悲鳴をあげてしまった：恥ずい。

まあ、それでもなんとか探索し終え、いつものように行動して、派遣部隊が帰ってくるのを待つ。

で、帰ってきたんだがいい物を持って帰ってきた。

祝福の肉塊

【食べると滋養強壮、疲労回復、精力旺盛、成長促進、一定時間筋力アップ】

スネークとバットも普通に肉を落としていたが、その肉とは、焼いて食ってみたら別格だった。ほとぼしる肉汁に香ばしい匂い、はつきり言って今まで食ってきた肉はなんだったのか？と思うほど美味しかった。涙が出るほど旨かった。

ただ、欲求不満でムラムラするわ、白飯が無性に恋しくなるわで大変だった：それに、ゴブリンにも食わせたんだが、そのため、残りの肉が、あつという間になくなってしまった。

よって、五階層に上がることにした。

ん？お前のあの油断大敵の精神は何処にいったかだって？

バーロー！

やっつと、まともな飯にありつけたんだ！

こっちは、まだまだ食い足りないんじゃないじゃボケエ！カス！マヌケーー！
！今宵は肉祭じゃー！

というわけで、五階層につきました。で、あの肉を落とすモンスターを見つけたんだが：豚を醜悪にしたような顔に悪臭を放つ分厚い体：いわゆるオークというモンスターだった。

こんなモンスターから、あのお肉がドロップされるのは信じがたかったが、あのお肉を食べるのならば些細なことである。で、オーク狩りをゴ布林達に任せて、我慢できずに俺だけ焼き肉をしてたんだが、匂いでめっちゃモンスターがよってくる。ただ、焼ける肉の匂いにつられて死地にくるオークがなんか可哀相だーゴ布林達も肉が食いたかったのか、オークを見つけたら見敵必殺だったからだーオークよ：お前が悪いんじゃない。お前が落とすアイテムが悪いんだ。災難だったな：結局、虐殺されるのが豚の宿命なのだよ。

この日から、主人公達の日課にオーク狩りが加わったのであった。
皆の者：オークに黙祷！

五話（前書き）

明日、投稿できないかも…

五話

「隊長くもう食ってもいいっすかあ？」

「ハアくこの馬鹿者がくまだ焼き始めて一秒もたつとらんわ」

「えくだって半生が一番旨いんっすよく」

「あのね、ゴーくんく焼き始めて一秒もたつてないお肉を半生とは言わないんだよ？」

「へえくそうだったのか。やっぱり、あくちゃんはすっげえな。」

「そ、そんなことないよ。常識だよっ」

「あくちゃんくじょうしきって何？うまいの？」

「く……く」

「はあくくほらっ焼けたぞ。さっさと食え。」

「おっ隊長くありあくっす。」

「隊長くありがとうございます。」

モグモグゴックン

「「「ウマーーーー!!」」」

うん…わけがわからないと思われるだろう。

実際、俺も困惑している。どうしてこうなったのかというと、オークを狩って、ゴブリンと俺で肉を食いまくったことに起因する。

いや…な、チートが日本語を暇な時に他のゴブリンにも教えていたわけだが、肉を食うまでは、ハイゴ布林ロードの一部が少し喋れるようになった程度だったんだ…が！肉を食い始めてからは、あら、不思議、肉の効果かしらんがどんどん喋る個体が増えはじめ、しまいは、三週間程度で全てのゴブリンが日本語を喋れるようになったとさ…

そのため、区別を付けるために名前を適当につけてやった——ゴメスとかクレヌンティウスとか色々——で、やはり人格？ゴブ格か？の形成はボブゴブリンの頃から始まっていたようで、その性格は多種多様である。まあ、中には頭が弱い奴もいるんだがな…

あと、頭が痛い事象がいくつかある。知っての通り肉を食うとムラムラするんだわ。で…ゴブリンの♂も♀もそれは変わらないようにで思わずやっちゃまって、出来ちゃったらしいんだ。なにがとは言わないが…

ただ、俺もそれに関しては強く言えない。だってな…俺もチートを下半身的な意味で襲ってしまったからだ。

仕方がないだろっ！

五階層に上がって一週間もしないうちにチートが進化したんだが、めっちゃ俺好みの女になったんだよ！

拔群のプロポーションに赤褐色の肌、長く艶やかな銀髪、男を魅力する美貌に額の側面から伸びる二本の角もいいアクセントになり彼女の魅力を引きだしている。ってなもんだ。最初は我慢出来たんだが、肉を食ってムラムラした俺は我慢できずにハッスルしてしまったわけだ。まあ、チート自身はめっちゃ喜んでいたんだが…後々、聞いてみるとそれもそのはずである。

俺が、チートに外に出たらこんな女を買いたいなあとか、妄想を垂れ流していたため、チートは私が王を慰めたい！と、一念発起したため、この進化の道がでてきたらしい。ああ…進化の道ってのはチートの話によると、頭の中にこれから自分が進化できるであろう種族が、思い浮かんできたので、その事を便宜上、進化の道と言ったらしい。これも全然わからねえわ…

で、俺とチートの行為を見たゴ布林達もいつの間にか、俺達の真似をしており、この問題が発生してしまったわけだ。まあ、禁止といえばやらんだろうが。

で、確認したところ、妊娠したゴ布林は36体であった。産ませないことも考えたんだが、鬼畜すぎる考えのため止めた。それに、どんな奴が産まれるのか興味もあるしな…

という感じだ。この時点で、五階層に上がって五週間程度経過してははずだ。これから、チートがなった淫鬼…サキュバスゴ布林―乱れっぷりがやばかったです―を召喚してLV上げをしようと思っただが…うん、殺りづらい。たとえば、モンスターといえど、サキュバスゴ布林は多種多様な美貌をもった女の姿なのである。

なので、ゴブリン達に倒させて、他のゴブリンが違う進化をするまで、俺だけは今までどおりにハイゴブリンを倒すことにした。

実際は、他のゴブリン達に倒させているから、鬼畜な事には変わらないし、今までゴブリンを倒してきた俺には今更であるが……気分的にこちらの方が楽なのだ。召喚したモンスターは消耗品だと割り切ったつもりだったのだが、我ながら情けないものである。ただ……チートだけは、今回の件で、俺の精神的・肉体的な支えに成りつつあるため、消耗品とはもう思えないだろう。もしかしたら、他にもチートみたいな存在が出てくる可能性もあるため難儀なものだ。

五階層に上がって、三週目に入ろうかというところでハイゴブリンが進化しはじめた。三メートルほどの巨体に銀色の長髪、凶悪な顔をもった大鬼……オーガにオーガを二メートルほどの体にし、腕が長く手先が器用な技工鬼……デクストオーガなどになった。その後、一週間ほどでハイゴブリンロードも進化しはじめた。体格も顔も人間よりになり、より理知的な瞳をもち、攻撃魔術スキルが得意な魔導鬼……スペルロードに、回復系と補助系スキルが得意な治療鬼……クレリックロードなどだった。

妊娠中に進化したものに、なにか悪影響がないか少し心配である。

まあ……心配は杞憂だった。五週目に入る前に普通に産まれたからだ。産まれた子は母親の種族になり、スキルもある程度受け継いでいた。後、全ての子が絶対盲信というパッシブスキルを持っていた……絶対盲信はほとんどの配下も持っており、効果は俺の支配下から絶対に変わらず支配下にいるかぎり能力に補正が付くというものだ。なんか真面目に怖かった。

産まれた子供の成長力は異常であった。一日で歩きだし、三日で日

本語をある程度喋れるようになり、見た感じ、能力の上昇率もチートについて高かった。サラブレッドという奴だろう。

で、五階層にきて十週が経った。オークの肉も相当貯まり、子供らも戦えるようになったので六階層に上がる事にした。それに、六階層に上がった部隊が帰ったアイテムにもいいものが多くあったので楽しみだ。

祝福された果実

【食べると成長促進、精神安定、状態異常回復、体力回復、知力アップなどの効果あり】

天恵の大葉

【食べると寿命延命、幸運補正、全ステータス一時的にアップなどの効果あり】

これらと香料——効果が、へばいため紹介してないが胡椒とか唐辛子っぽいものがドロップアイテムの中にあった——などを合わせて作ったソースを肉にかけて食べるとめっちゃ旨い。幸せだ。

で、上がってきたわけだが六階層の出現モンスターは、今まで出たモンスター＋ニメートルほどの人面樹・フェイスウッド——こいつが果実と大葉をドロップしたっぽい——に、ハイコボルト——五階層で出ていた——をでかくして全身が硬い毛で覆われた人狼・ワーウルフ、でっかいカマキリ・ビッグマンティス、でっかいカブトムシ・ビッグアトラスなどの昆虫系のモンスターが多かった。はつきり言って、六階層の変わりようが原因だろう。まるつきり森なんだ：いや、普通の木も土もあるってなんでよ？まあ、次の階層への魔法陣はオーガの案内で見つかったから、文句はないんだが。この塔はまじで不思議ちゃんすぎる。

それで、途中で見つけた泉に拠点を作り探索することにした。広すぎるのと通路や部屋がないため、位置がわからないことから、まだ全てを探索しきれていないらしい。そのため、迷った時に困らないように拠点に残ったやつが一定の間隔で狼煙を上げることに決めた。

で、俺はというと、チートと二人で泉でニャンニャンしていた。いやーもうね、具合が良すぎて溺れております。人間の女なんかもう抱けませんわ：んで、賢者モード中に収納の指輪からだした、果実をかじってたんだが果実の種を見てふと思ったのだ、これ植えたらどうなるんだ？と：早速、適当な場所を見つけて植えてみた。まあ、俺もそこまで馬鹿じゃない。このままじゃ何日も待たないとなにも生えて来ないのはわかってる。なので、色んな薬品を使ってみることにした。うん、効果は上々だった。成長促進効果をもつ薬品を使ったら一気に育ち始めた。まあ、副作用って感じで土壤そのものの栄養素がすぐになくなり、枯れはじめた時はびびったが回復薬——ずっと回復薬が出続ける。という効果がある『涌治水の杯』☆1というアイテムがあるのでいくらでも使える。——を使ったら土壤も樹自体も元気になったので、成長させーの回復させーのと続けたら実がなった。で、この果実にも食った果実と同じ効果があり、普通に旨かった。

で、収穫した後の樹に、薬品以外でも効果があるのか試すために成長促進効果のあるブレスレットをかけたてみたら、すぐに果実が生えた。やばいコンボを発見してしまったようだ。

話は変わるが、俺のサラリーマン時代の夢は土地を買って、なんらかの作物を作る生産者になる事だった。だからこそ、これが相当に異常な事だとわかる。と、同時にものすごく嬉しくもある。この塔

を出た後に、何をするかの展望が見えたからだ。

俺は、大規模農業をやる！！24時間無給で働く資本家達の夢とでも言うべき労働力（ゴブリン！イエー！）決して衰えない土壌に作物（回復薬チート♪イエー！）これさえあれば勝つる！！！！

異世界から飢えをなくしてやるぜヒャッハー！！！！！！！！

六話（前書き）

今日は、超頑張って書き上げました。

ただ、面白いかは、わかりかねます。
まあ、どうぞご覧ください。

六話

「ゴーは右！カーとリーはゴーと私の援護をしつつ周囲に警戒！ア
ーとミーは攻撃スキルの準備をしとけ！」

「「了解です、隊長！」」「」

「ウオオオオオオ！！」

「って、ゴーの奴もういつちまいやがった！」

「行動が早いのは良いことだ…」

「でもよ、リー、合わせる方の身にもなってほしいぜ？ああも突出
されると援護がしにくい。」

「そこは腕の見せ所だ…」

「へいへい、そうですね。とっ、よし、右、一匹殺ったぜ。って、
まーた、何匹か来やがった。」

「こっちは左を一匹殺った…隊長ならばすぐに倒すだろう…行って
くる…」

「了解。あらら、リー？その必要はないみたいだぜ？アーとミーの
スキルが発動したみたいだ。」

「む…そうか…」

「隊長！ゴーくん！離れて！」

「「了解」わかった」

ドオオオオン！！

「ヒュー♪いつ見てもすっげえ威力だな。黒焦げだぜ、あいつら。」

「さすがだ…」

「ゴー！怪我はないな？」

「隊長！ないっす。」

「よしっ！では、周囲に警戒しながら探索を再開するぞ。」

「「「了解です！」」」

「えー隊長！飯食いましょうよ！飯」

「たはは…ゴーくん？一時間前に食べたばかりでしょ？我慢しよ
うね？」

「う…わかったよあーちゃん。」

「ふふっ、アーちゃんとゴーくんはいつも仲がいいですね。」

「応っ！そうだぞ俺とあーちゃんは仲がいいんだ。」

「ミ、ミーちゃんっ、そんなことないよっ、普通だよ。」

「あら、アーちゃんったら照れなくてもいいのですの……ここは押すところですよ？ あーちゃん（ボソッ）」

「あ、あううう」

「ハア……無駄口たたかずにさっさと行くぞ！」

「「「了解です。隊長！」「」」

「わかった」

以上が先遣探索部隊 第六小隊の日常の一コマであったりする。

で、俺はというと果樹や香料、森で見つけた食える野菜の量産をしていた。はつきり言おう、めっちゃ面白い！ 病気もなく、育てたら育てただけ帰ってくるってのはいいもんだ。んでも、日光がなくてもきちんと育つつつゝのは不思議なもんだな。煙を焚いていたから気づいたんだが、どうやら天井自体が光っているらしい。煙が平べったく広がる様を見なければわからなかっただろう。で、森を探索していたやつらも森の果てに壁があったと報告してきたので、ここがまだ塔の中だったのは確定だ。実は、あまりの変わりように、いつの間にか塔以外の場所に飛ばされたかも？ と疑っていたので安心？ した。

まあ、そんなこんなで腑抜けていたわけだが、驚愕の新事実が発覚した。いや、久しぶりにチートと手合わせしたんだが……思っていた以上に強くなっていて初めて、チートに負けてしまったのだ。うん、

種族的に、おそらく人間＜淫鬼なんだろう。だが、だが！だが！！俺も男だ！！！！確かに種族としては負けていよう。♀より♂の方が優秀だ！と声高に言う気も全くない。けれども、男には引いてはならない時があるというのもまた事実である！

諸君らの中には

「下手なプライドだ。そんなものはクソの役にもたたん。某、野菜王子のような噛ませ犬になってしまうぞ。悪い事はいわない。そのようなプライドなど捨ててしまえ。」

と、俺の身を案じ、忠告をしてくれるお方が、一人ぐらいはおられるかもしれない。

それでも、私は屈しない。

ここに、私の、私による、私のためだけの、強化計画を実行することとを宣言する！！

『アクションスキル…狂化が発動されました。STR、VIT、SPDに大幅な補正が加えられINTが大幅にダウンします。』

「ウオオオオオオオ！！！！」

雄叫びをあげ、召喚したモンスターの海に突っ込んでいくという、俺の暴挙を、チートは陶醉したような瞳で見つめていたそうなの。

あれから、どのくらいたったのかわからないが、突然、頭の中で選

択を迫られた。と、同時に理解する。ああ、これがチートが言っていた進化の道だということを：

『進化先を決定してください。』

第一進化先…皇人…ハイ・ヒューマン

第二進化先…狂人…バーサック・ヒューマン

第三進化先…条件を満たしていません

特殊進化先…鬼王…デーモンキング』

もう少し進化先が多い方が、個人的には嬉しかった。少しだけ鬼王…デーモンキングというのに惹かれるものはあったが、ほとんど即決でハイ・ヒューマンに決定した。やはり、なんだかんだいって、産まれてからずっと人という種として生きてきたのだ。愛着というものがある。

バーサック・ヒューマン？なにそれ？記憶にないし：

で、起きたわけだが、チートにひざ枕をされていた。おおー：学生時代の夢が今ここに：などと悦に浸っていたら、チートが、いきなり泣きながら、抱きしめてきたのにはさすがに困惑した。話を聞いてみると、あれから三週間くらい俺は召喚したモンスターと戦い続けていたらしい。で、今さっき、いきなり動きを止めて、モンスターの攻撃——いつもは、無抵抗のモンスターをいたぶっております。今回は、狂化の影響でモンスターを召喚する程度の知能しかなかったので、まともに戦っています。まあ、狂化の効果で、いつもより殲滅速度は上がっていますが：——が直撃し、吹っ飛ばされて、

今にいたるらしい。

で、チートを泣きやませて、色々この三週間の事を確認した。やはり、俺があんなだったため、チートが指揮を取っていたらしい。確認した結果、ほとんど、問題と言えるような問題もなかった。探索部隊の指揮も植物の世話も、なんなくこなせたらしい。チートに、俺に何かがあった時はお前が指揮をしろと命令していたのが幸を奏したようだ。

俺グッジョブ！

早速、ハイ・ヒューマンとなった俺の力を確認するためチートと手合わせする。うん：楽勝だった。なんていうか　ヒューマンLV1000 ≤ ハイ・ヒューマンLV1　こんな感じじゃなからうか？力が有り余りすぎて、なんか怖い。しかも、全知の眼のスキルで見れる情報が増えた。どうやら、俺の能力が低かったために十分にこのスキルの力を引き出せていなかったようだ。まあ、まだ途切れ途切れの情報の方が多くあるが：そして、負けた側のチートはというと、俺に陶然というか恍惚というか、そんな表情を向けてきている：

うん：決めた。今日は三週間きちんと指揮を採れたご褒美と俺がハイ・ヒューマンになれたお祝いを兼ねて、一日中チートの相手をしてやろう。で、その事をチートに伝えたら、さらに恍惚とした表情になった。余談であるが、ハイ・ヒューマンになってからのタフネスは凄まじいとだけ言っておこう。

そんなことをしていたら、探索部隊が帰ってきた。で、探索成果の中にいいものがあった。

魔術書『延連たる回帰』☆2

(そこは希望か 絶望か 行くがいい)

【何度でも塔から帰還することができる。 永久品】

うん、求めていたものだ。これで、手下のモンスターといっしょに帰還できるだろう。まあ、まだ帰還するには、問題が多々あるだろうがな。他には、妊娠が確認された♀が52匹程度いたことか。まあ、探索部隊が少し減る程度で他の奴らで補えば問題はない。将来は俺の労働力として頑張ってもらおうか。

こんな感じで、着々と帰還の準備を進めていたら、もう、六階層に上がって十週がたった。そろそろ、頃合いかと思いい七階層に上がる準備をする。果樹や香料の苗なども抜いて保存したため――五階層で、どんなものでも、どれだけでも入れる事ができるという効果の『狭間の指輪』☆5というアイテムを手に入れていたため、重さを気にせずに、全部持っていけた。――いつもより時間はかかったが無事に七階層に上がることができた。七階層は、広かったが、普通に通路と部屋があった。何か安心するのはなんでだ？

で、だ：なんか、なにも大きな出来事はなく、十週が経過してしまっただ。いやいや：めずらしい☆品とか、出産とか、えげつない罨とかは普通にあったんだが、もうそれが当たり前になってしまっただ筆すべき事ではないのだ。

そのため、八階層に上がることにした。八階層は、火山滞だった。ところどころにマグマが溢れていて、最初は、もの珍しさから興奮して進んで探索していたが、ものすごく熱いため、めんどくさくなっただので、できるだけ涼しい場所を探して拠点をたてた。で、途中で見つけて持って来た岩石を鑑定して見ることにした。

中身がやばかった！金に白金、ダイヤモンドなどの鉱石の原石ばかりだった。ちょっと、この世界での価値はわからんが、これは、取っておいたほうがいいだろう。というわけで、オーガなどを召喚しまくって、掘らせる事にした。

俺はというと、原石の精製方法の研究をすることにした。ここで、全知の眼とハイ・ヒューマンの高いDEX、灰吹法などの現代知識が役に立った。まず、全知の眼でその金属の特性を把握し、高い器用さで精製をするための道具を自作、その後、マグマやスキルを使い、温度調整をし、なんとか不純物の少ない金属を精製することに成功した。ここまでで、七週間くらいかった。まあ、いつになく楽しかったので別にいいのだが。で、大きくて純度の高そうなダイヤモンド——カッティングは、練習したらずぐにできるようになった——をメインに白金を軸にして金で装飾を施した指輪、ピアス、ネックレスをセットで作り、チートにプレゼントした。まあ、反応は最上だった。その日の夜はオイラのマグマが噴火しますた。

つと、まあ、こんなふうに俺が趣味に没頭していた間、チートに色々と任せていたんだが結構な問題が起きていた。なんか、ものすごく強いモンスターが九階層に現れたため、先遣探索部隊が半壊してしまったのだ。なんとか物量作戦とロードによるスキルの飽和攻撃で倒せたらしい。

で、最期の一撃を加えたオーガが進化したらしいんだが、とにかくデカすぎる。鬼龍・デーモンズドラゴン…体長は優に100メートルを越えており、禍々しい外骨格に巨大な翼、くるりと曲がった羊のような角、そしてつぶらな瞳…うん…そんな奴がつぶらな瞳で、頭を垂れて俺を見詰めてくるのだ。

怖ええよ…俺にどうしろと？絶対お前さん俺より強えだろ！誰か助

けてー！ー！

閑話 部下の心、王知らず（前書き）

えゝ用事があり遅くなりました。

すいません。

閑話 部下の心、王知らず

そのモンスターは、徹が迷宮に入ったのと同時に生まれた。――これには、塔の理が大いに関係しているが、その話は、また次の機会に――そのモンスターの最初の姿は、ドラゴンであった――といっても、九十階層付近にでる高LVなモンスターなのだが――ただ、☆スキル・探索者を生まれながらに持っていたため、塔を自分の意思で上り下りすることができたのだ。それにより、全てが変わっていく。

普通のモンスターは生まれた階層で、その一生を過ごす。そのため、縄張り意識が非常に強く、異物が、縄張りに入って来た場合、全力で排除に動く。そして、生まれたばかりのドラゴンは、無意識に一つ下の階に降り、その洗礼を受けた。もし、上の階に上っていたのなら、すぐに、殺されて、その一生に幕を下ろしたのだろうが、運が良かった。ドラゴンは、その階層の全てを食い尽くし、洗礼を乗り越えた。…この時から、モンスターは破壊と破滅の象徴たる闇に愛された。

そして、破壊と破滅をもたらしながら、下へ下へと降りていき、この日、とうとう、探索部隊の面々と邂逅を果たした。それまでの過程で、いつの間にか、暗黒龍…ダークネスドラゴンへと変貌をとげていたのは些細なことである。ダークネスドラゴンの体長は、120メートルをゆうに超えており、全身が闇に覆われているのでは？と錯覚するほどの黒に染めぬかれている。凶悪な威力のブレスとその巨体から繰り出す攻撃はまさに必殺である。けっして、九階層ごときに現れていいモンスターではない。だが、第七回先遣探索部隊の者たちにとっては、不運なことに、それは九階層に現れた。

最初に、異変に気付いたのは、第三小隊所属のデクストオーガ…デークンであった。彼はまさに索敵に特化した能力構成であり、また、幾多もの経験を備え、九階層をまるで自分の庭のように闊歩していた。そんな、デーの耳に遠くから嘶きが聞こえたのだ。デーは、自分の索敵によって奇襲を成功させ、部隊にひいては、王に貢献する事に誇りを持っていた。だからこそ、隠蔽スキルを使い、すぐさま嘶きのした場所へと向かった。そして、デーがそこで見たのは。まるで、暴風のように猛血牛…カウホーンの一団を食い荒らすダークネスドラゴンだった。デーは、その光景に見惚れたが、彼の本能が一瞬にして、撤退行動をとるべき、あれは触れてはならない存在だ！と警鐘をならした。そこからは、一分の隙もない見事な撤退行動であった。それにより、黄金より貴重な情報を持ち帰ることができ、スペルロードのスキル…念話により、すぐさま全ての小隊にその情報が伝達され、スキル…念視をもつ者とデーの強い要望により、撤退することが決定された。

ただ一つ誤算があった。ダークネスドラゴンの能力は尋常のもではないのだ。かの者がこの階層に現れた時点で、九階層の全てを把握し、掌握していたのだ。そして、先遣探索部隊そのものが、まるで、一個の生物のように動いていることにも気がついていて。だからこそ、あの小賢しい一匹を見逃した。それらを一箇所に集め、全てを破壊し、撃滅するために…それこそが、かの者の暗黒の頭脳が導きだした結論であり、破壊と破滅を司る暗黒の名を冠する者に相応しい結論でもあった。

「総隊長！やはり、八階層への扉が無くなっています！！」

『スキル…暗黒世界が発動しています。これにより、九階層は塔から隔離されています。』

「っ！？どういう事だ？ザーよ、おぬしならわかるかの？」

『スキル…看破が発動しました。これにより一定の情報が得られます。』

「うーん、どうやら、例のドラゴンのスキルのようです。おそらくは、あれを倒すまではこの状態が続くかと…」

「チッ、厄介だの、撤退は無理かもしれんのう…それで、第一二、一七、二五、二七小隊はどうだ？」

「十二と一七小隊は合流して、こちらに向かっています。第二五、二七小隊の方も間もなくこちらと合流できます。」

「そうか…後は、あれが、どうなっているかわかるかの？」

「ふむ、どうやら大分離れた位置にいますね。時期に全部隊が無事に合流できるでしょう。」

「わかったわい。では、どうやって、あれを倒すかだが…誰か案はあるかの？」

「そ、総隊長、あ、あの、ドラゴンは尋常のものではありません。に、逃げる事にのみ集中すべきかと…」

「確かデーだったかの？我々は退路を断たれたのだ。逃げたくても逃げられんわ。」

「で、ですが…」

「まさか…！おいつ、誰かこいつを診てやれい！」

「私がっ……どうやら、恐怖を受けているようですね……治します。」

「やはりか…直接見ただけで状態異常を与えてくるとは厄介だのう。」

「ええ…戦う時は、事前に果実を食べるのがよろしいかと…」

「む…王から賜った品をやすやすと使うのは心苦しいが致し方ないかの…全小隊に伝えておけ！」

「「はっ！」」

「それで、あれを倒す方法だが―」

「奇襲、もしくは罠により、毒、麻痺、即死などの様々な効果を持つ薬品で弱らせた所を叩くと言うのはどうでしょう？」

「デーか…恐怖はぬけたようだな…うむ、いい面構えだの。それで、お前の考えは悪くはないが、あれは、尋常のものではないのだろう？そう簡単に上手くいくのかの？」

「それは…わかりかねます。ですが、我々ですら梃子ずる、カウホーンの群れを楽々と殲滅する相手です。真っ向から戦かって打ち倒せる相手ではないでしょう。それに…私は恥体を曝してしまったのです…死を賭けてでも私がこれを成功させてみせましょう。」

「ふむ、誰もおぬしを責める者などおらんと思うがの…だが、吐かしおるわ。よかろう…やってみるがいい。」

「では！」

「さっさと準備をせい。」

「はっ！」ザッ！

「よろしかったので？総隊長。」

「うむ、失敗してもしなくても、やる価値はあろうて、それに、あの男の眼に何か感じる物があったのでな…さあ、奴が失敗した場合に備えての次案を提示——」

「隊長方！第一二、一七、二五、二七小隊の本隊への合流が確認されました！」

「間もなく部隊長達がこちらに合流するよう——」

「グルオオオオー！！！」

突然であった。その瞬間から九階層は大幅に改変され、探索部隊が駐留していた場所は、ダークネスドラゴンの支配下におかれた。闇

から這い出てくるドラゴンの姿は、探索部隊の面々にとっては、正に悪夢であっただろう。そして、ドラゴンの口から暗黒色のブレスが放たれた。

ドオオオオン！！！！

ドラゴンの奇襲を受けた前線は悲鳴と怒号が飛びかう阿鼻叫喚の地獄絵図になった。そして、それはドラゴンの脳髓に甘美な刺激として伝わる。彼は、自分の力を誇示できる瞬間が好きだった。彼は、弱者をいたぶる瞬間が好きだった。だからこそ、一撃で全てを撃滅できるのに、敢えて威力を抑えてその地獄絵図を作りだし楽しんだ。

そして、それこそが探索部隊にとっては、今日一番の不幸中の幸いであり、ダークネスドラゴンにとっては、今日最大の過ちであった。

「そ、総隊長！と、突然、ド、ドラゴンが現れました！」

「わかっておるわ！戦闘体制に移行するぞ！オーガとデクストオーガは前線に防衛線を構築！クレリックはオーガ達の治療と支援、スperlロードは後方からスキルによる攻撃をせい！」

「念話により各小隊に伝えました！もう動いているようです。」

「さすがじゃな、農らも行くぞ。」

「ハッ！」

確かに、彼らの行動は迅速だった。だが、それよりも早く動いた者がいた。デーである。彼は、割り当てられたオーガ達に果実とステータスアップ系のアイテムを食べるように徹底させ、すぐさま行動

に移った。

「これより、あのドラゴンになんらかの状態異常を付加させるために前線に赴く。決死になるだろう。ついて来たい奴だけついて来い。」

王のために、一つの意志の下に生きる彼らにとっては愚問であった。ただの一人も離脱することはなく彼らは強化された脚力により数分でドラゴンの下に辿りつき、

《喰われた》

そして、これこそがデー達が成した作戦でもあった。デー達は、自分達に芳醇な香りを嗅ぐわせる肉を巻き付けドラゴンの気を引いたのだ。そして、喰われる瞬間に指輪に収納していた大量の薬品をだし、自らと共にドラゴンに喰わせたのだ。効果は劇的であった。確かにドラゴンには、ほとんどの状態異常に対して耐性があった。だが、耐性があるだけであり、絶対に状態異常にならないわけではないのだ。だからこそ、ドラゴンは、ほとんどの状態異常をきたし、オーガの部隊でも、なんとか抑える事ができるほどまでに、その戦闘能力を落としたのだ。まさに、デー達の執念であった。

「グルオオオオ!!」

「がはっ」

「ひでぶっ!」

「エイドリアーン!」

だが、それでも苦しいものであった。その時点で、探索部隊の三分

の一ほどは削られており、ドラゴンも死に物狂いで向かってきたからだ。

しかし、この戦いに参加した者達、全てが決死の覚悟をもった勇者であった。悪いドラゴンは勇者に滅つされる。何処かの三文小説のようだが、遂にドラゴンはその膝をつき、オーガ達の突撃により息絶えた。実に六時間以上にわたる死闘であった。クレリックの回復スキルと支援スキルによる、オーガの継戦能力の向上、ドラゴンの慢心に、状態異常による消耗、スペルロードの息を合わせた複合スキルの連発。各部隊長による正確な指示。何か一つでも足りなければ達成できなかったであろう。大捕物である。

「グリリン：お前の仇はとったぜ…」

「隊長！生きてたんですね！びえ〜ん」

「ナーたん、俺と結婚してくれ！」

「…ごめんなさい：あなたの顔、タイプじゃないの…」

「そ、そんなあ〜」

探索部隊の面々は歓喜に湧いた。それはそうであろう。あれほどの敵を倒せた上に、ドラゴンの死骸が消えた後には、たくさんのドロップアイテムと、喰われたはずのオーガが、幾人か生き残って見つかったからだ。すぐに治療が開始され、ほとんどのオーガが一命をとりとめた。ただ、その中に、デーの姿がなかった事だけが残念ではない。

「グオオオオ！！」

そして、そんな歓喜に水を差すうめき声が場に響いた。最後の一撃を加えたオーガ…ゴメスの進化が始まったのだ。そのオーガの進化は、生き残ったほとんどの面々が警戒感を抱くには十分なほどに異常であつた。そう、鬼龍…デーモンズドラゴンの誕生である。

「グルオオオ！」

「あゝ腹へつた…肉くれ肉〜」

「「「「「なんでやねんっ」「」「」×いっぱい

そして、その進化をした本人はというと、デーモンズドラゴンになったために起きた空腹により、肉を所望した。外見ドラゴンな彼のシニールな姿に、ほとんどの者達が王直伝のツッコミを入れたのを誰が責められようか。だが、あまりのシニールさに、彼が誰だか気づいた者もいた。そう、第六小隊の面々である。

「ゴーくん？お肉は王様の所に戻ってからにしようね？」

「えゝ、あゝちゃん、俺もう、我慢できないよ〜」

「うっ（これはこれで、ちょっとかわいいかも）た、隊長〜」

「ハアゝ、わかった…総隊長！彼に食事を与えてもよろしいでしょうか？」

「う、うむ、いいじやろうて…」

この、雰囲気のにまれて採った選択を、総隊長は忘れないだろう。

なにせ、一ヶ月ぶんの肉が一瞬にしてなくなったのだ。しかも、総隊長は、自らの肉を奪われた者たちに、帰還中ずっと白い目で見られ続けた。食べ物への恨みとはげに恐ろしきものである。なお、魔法陣への扉や迷宮の通路や部屋などが、デーモンズドラゴンが進む時だけ、デーモンズドラゴンに合わせて変化していたため、帰還は順調に進んだ。それだけが総隊長の救いであった。アーメン。

七話（前書き）

扇風機さん、ガケンさん、感想ありがとうございます。励みになりました！

ということですか？本日、二本目でございます。

七話

「うおお！すっげええ〜！ヒィイヤッホー！」

ん？何をやってるかって？例のドラゴンに乗って空の散歩をしてる所だ。羨ましいだろ？

ふっふ〜ん。

うん…少し、いや…だいぶ大人げなかったな…でも、子供の頃の夢が目の前にあるんだぜ？許してくれって。メンゴメンゴ。

最初はさ、コイツのデカさと威圧感にメッチャびびってたんだが、ハスキーボイスな日本語で自己紹介をされた時点で笑いに変換されたわ。なんで、そんな外見で声がかわいいんだよ。似合わね〜よ。んで、お前、面白いな。と、褒めたら嬉しかったのか、いきなり、飛び上がり天井に頭をぶつけて、マグマの海に墜落したのだ。そのあと、どうやらマグマが熱かったようで、侮様にじたばたとし始めたのだ。そして、その動作がなんというか笑いを誘うものであったのだ。

めっちゃ腹痛い。

どうやら、俺を笑い死にさせるつもりらしい。いかん強敵すぎる。

というようなことがあった。うん、こんなのを、ど〜やって恐れる

と？俺には無理だ。で、テンションマックスでゴーくん——自己紹介された。本名はゴメスらしい。俺が名付けたらしいのだが似合わない——に乗って飛んでいたんだが、火山滞に妙な洞窟を見つけたため、ゴーくんに指示を出して行ってみることにした。で、入ってみたんだが、洞窟の中には、たくさん宝石の結晶に、良質な鉱石の鉱脈があり。嬉しいことに温泉が湧きでていた。ええ、もちろん、ひとつ風呂浴びさせてもらいましたよ。いい湯加減でございました。今度はチートといっしょに入りに行こうと決意した。ああ、その間、ゴーくんもマグマの風呂に入っていたみたいだ。なんか熱さになれたら癖になったらしい。うーん、ゴーくんはMなのかもしれん。

で、帰ってきたんだが、まだ宴会が終わっていなかった。いや、まあ、ゴーくんがこんなになっているし、部隊も半壊したのだから何か本当に大変なモンスターと戦ったのだろう。と、簡単に想像がつく。なので、彼らの苦労を労うために祝宴を開くことを決定したのだ。で、宴会中、暇になったからゴーくんと空の散歩に行っていたというわけだ。

また、温泉に行こうかと思い、チートを探すことにしたんだが、俺が試しに召喚したデーモンズドラゴンで特訓をしていた。で、なんでも宴会に参加せずに特訓をしているのかと思い、話を聞いてみたら、俺の配下で一番強い座をゴーくんから取り戻したかったらしい。うん、なんか俺に報告する前に、一回、戦って負けてしまったらしい。で、リーダーをゴーくんに譲ろうとしたんだが、他の部隊長や一般兵士にゴーくん本人から反対意見があいついだため発言を撤回したらしい。だが、やはり納得がいかないので特訓をしていたみたいだ。うん、真面目だ。

それに、その気持ちは、俺自身わからんこともない。なので、デーモンズドラゴンを新しく召喚して、特訓を手伝ってやることにした。

相手の攻撃方法や動作を知るのも重要だが、やっぱり、強い敵を倒して力を吸収したほうがてっとり速いしな。というわけで、チートと一緒に、ドラゴンを倒したんだが、硬い硬すぎる。一体のドラゴンを倒すのに三十分はかかる。しかも、その間ずっと、無抵抗のそのの苦しむ声を聞くのだ。いつもは、あっさり殺せて死体も残らないだけに後味が悪い。まあ、それでも我慢してやった甲斐はあった。何と言うか、チートも俺も進化をすることができたのだ。

淫鬼・サキュバスゴブリン↓戦淫鬼・ナイト・サキュバス↓皇淫鬼・クイーン・サキュバス、背丈とかは変わらないが、なんというかすっげ〜エロくなった。耐性がなかったら見ただけで射精すんじゃない？

皇人・ハイヒューマン↓皇主人・キング・ハイヒューマン、なんも変わってない：チート談では、見ただけでイッてしまうそうだ。うん、嘘は言っていないようだが一言、謂わせてもらおう。お前だけだ！

こんな感じだ。つゝか、たった十体くらい倒しただけで進化できるとか、どんだけデーモンズドラゴンは格上の相手なんだ？しかも、ドロップアイテムも相当な物だった。うん、なんか、そう考えたらあいつらが倒したっていうモンスターは俺の想像よりもはるかに強いんじゃないだろうか？なにか、褒美でも作ってやるべきか？

いや、それよりもまずは、きちんと報告を聞くべきだな：最近は、趣味に走りすぎてそういうことを疎かにしていたのだ。今回も、どんなアイテムがドロップされたかさえもまだ知らない。でも、仕方がないと思う。俺、すっげえ器用になったんだ。図工3しかなかった俺の手から、将来、絶対に美術館に飾られるような代物ができあがるのだ。だからこそ、金属の加工は本当におもしろいのだ。そして、頭の中で想像した通りの品物ができあがった時の快感はなんともいえないし、その品物を贈って嬉しく思われるのもやはり嬉しい。っ

と、すまん、話が脱線した。とりあえず、仕方なかったとだけ言いたいのだ。

で、まずは、ドロップ品とかの確認をして、もう少し詳しく話を聞く事にした：

ここ、数ヶ月のドロップ品などを確認してみたんだが、なんというか、地上に戻るのに必要だろう、と思っていたアイテムが揃っており、いつでも脱出OKな状態だった。なんかこれに気づかんとか俺アホすぎるわ。猛烈な自己嫌悪の嵐が襲ってくるが、なんとか、この数ヶ月は無駄じゃなかったと自己弁護をして立ち直った。次に、生き残りの話を聞いて回ったのだが、やはり、相当やばい敵だったようだ。決めた。褒美を作ってやろう。別に、感謝をしてるとかじやなく、やはり、消耗品といえど、道具は永く大事に使うべきだと俺は思うからだ。

よしっ、早速、作ることにする。やはり、勲章的なものもいいよな：あれをこうしてつとこれはこっちで、うんうん、我ながらいいデザインだ。で、なんというかやりすぎた。なんか夢中になっていたら一ヶ月ぐらい経過していて、無駄にクオリティの高い物を作ってたのだ。そしたら、渡された配下が全員泣き出した。ああ、死んだ奴のは、そいつの子供、親友、彼女などに渡した。で、その流れで、今までに死んでいった配下の追悼式的な物をやったら全配下が泣いた。そして、収集がつかなくなったため、全オレも泣いた。後日、わかったのだが、この時の俺の涙は、死んだ配下へ向けて流した涙だと解釈されたようだ。俺に夢を見すぎである。

ああ、そうそう。この一ヶ月で、色々と変わった。

オーガ、デクストオーガ↓一目鬼…サイクロプス、大鬼士…ナイト・

オーガ、鬼技士…エンジガ、土大鬼…アースオーガ↓禍鬼…デーモン、巨鬼…トロール、鍛冶鬼…デーモンミス、土禍鬼…アースデーモン。

クレリック、スペルロード↓上級呪術鬼…ハイスペルロード、上級治療鬼…ハイクレリックロード↓聖鬼士…パラディンロード、鬼術師…グラスロード、鬼術師…ワイズロード。

妊娠した♀↓百六体

生まれた子供↓三十二体

部隊数↓四十五部隊

総配下数↓二百七十四体

変化はこんな感じだ。

妊娠したのが多いのは、消耗したゴブリンを補完するために俺がそーゆうことをするのを解禁にしたからだ。で、一番の問題はゴークんだ…あいつの食う量は半端ない。デーモンズドラゴンのドロップアイテムにでっかい肉の塊がなければ肉が底を尽いていたところだ。

今は、六階層の森にゴークんと来ている。なんでかというと、『とこしえの地平球』☆5 これに、土地や建物や生き物を収納させる事ができ、いつでも収納した場所へ行く事ができるというものだ。うん、某、野菜先生の魔法球のパクリですな。で、六階層の土地を収納しにきたの——八階層のは収納済み——と、八階層で上から見ていると洞窟を見つけられたので、なにかあるかもしれないと思い来てみたしだいだ。一日中探したんだがなにも見つからなかった…ま、まあ最初の目的は達成できたからいいさ。で、今から十階層に行こ

うと思ってる。なんでかという、進化してから浮かんだ塔の情報で十階層ごとに踏破特典？みたいなものがあるようだ。なので、十階層まで探索して帰還しようと思ったのだ。

うん、今、十階層にいるんだが、めっちゃデカイ扉が一つあるだけだ。確実に今までの階層とは違うな…とひしひしと感じている。それと、いつ帰還してもいいように、配下のモンスターは球の中に入っている。いつまでもここに居るわけにはいかないので、扉を開けてみる。

でっかい二足歩行の牛がいた。あれだろう、牛鬼…ミノタウロス、筋骨隆々な体に丈夫そうな鎧、身の丈ほどの大斧、まうた、メジャーなモンスターである。そいつが、ふごふごいいながら突進してきたんだが、遅い！遅すぎる！！普通に避けた。で、攻撃を避けられたミノタウロスはというと、我が、突進をよくぞ避けたな。さすがは、ここまで来た猛者だ…とでもいいいたそうにこちらを見てきた。いや、そんな目で見られても困るし…何を言えバいいのさ？

あつ、俺からのリアクションが薄いからか攻撃を再開しやがった。つか、コイツ本気でボスなんかな？めっちゃ攻撃が避けやすいし。

「なあ？本気だせよ」

「ぶもっ？」

ぶもっ？って首を傾げられても…いやいや、お前がやってもかわいくねーし。気持ち悪いだけだぞ？

「なんかもつとマシな泣き声はできねーのかよっ」

「ぶうーもおー！！」

うん、なかなかいいな…いや、さっきがひどすぎたのか？

「OK！合格だ。」

「ぶもお〜」

うん？

「なあ？裸踊りしてみ。」

「ぶっも♪ぶっも☆ぶっもぶう〜も〜♪」

はい、どうやらミノタウロスも鬼属だったようです。楽でいいんですが、ミノタウロスを倒さないと十階層を攻略したと見做されないよ
うだ。

うん、さようならミノたん…君の裸踊りは忘れないよ。さらばだ、
また会おう日まで。

合掌。

八話（前書き）

少し話をまとめるのに時間がかかりました。

すいません。

毎日投稿してる人は、本当にすごい！

八話

「ぶもおおお……」

『十階層の主の打倒により、塔型迷宮…エンデュアルの十階層踏破が確認されました。踏破特典として、以下より☆スキルを、選んでください。』

1…アイテム効果付与

2…情報隠蔽

3…状態異常無効』

どうするべきか…はつきり言って、全部、ほしいんだが…よしっ、決めた。

『1…アイテム効果付与に決定しました。これにより☆スキル…アイテム効果付与が取得されました。』

これでよしっと、なんで、アイテム効果付与にしたかというところ、ロマンだ。考えてほしい、このスキルを使えば、俺が丹精こめて作った品物をまた、一つ上の段階に引き上げることができるのだ。もう、それだけでテンションが上がる！世界で俺だけにしか作れない名品…なんか、かっこよくね？そして、あわよくば、☆スキルでしか実現できないであろう効果を☆品や自分の作った品物などに、後々、付与できるかもしれないという思惑もある。最後に！大規模農業に

は、効率のいい手法が重要であると考えている。このスキルさえあれば、現代では、到底、実現不可能だった事もできるようになるやもしれん。こういった考えにより、このスキルを選んだわけだ。

で、今から、ミノタウロスを打倒した事により、発生した二つの魔法陣のうち、見慣れない方に入る。まあ、眼で見たので、これが、帰還用の魔法陣だとわかっていいるから、安心はしている。

：うん、なんか、どっかの小部屋に出たようだ。んで、小部屋の扉から出てみる事にした。きっと、この先には麗らかな日の光か、天の恵みたる雨、もしくは、優しい夜の帳が待っていることだろう。地上よ、私は帰って来たぞー！！

「な、なんだ、これ？」

喜び、勇んで、外に出たのはいいが、外は火の海だった。えっ？意味わからん、俺が求めていたのは、優しい夜の帳だけで、こんなに勢いがよく、熱そうな炎などではない！こう、なんていうのかな：もっと優しくて暖かい風景を望んでいたんだいっ。

「きゃああああ！」

「いやー！ー！」

「お母さーん！」

ずっと、現実逃避をしていたんだが、左耳につけている翻訳効果のあるピアスにより、聞こえる声はなんかめっちゃ切羽詰まっております、現実逃避を許してはくれない状況のようだ。で、気配を殺しな

がら、声のする方へ行ってみたんだが、広場？っぽい所で、同じデザインの鎧を着た男達に、女と子供、それに略奪品などが集められていた。それで、なんというか、えー、R-20越えな、グロい状況となっておりました。正直、こんなもの見たくなかったですわ。で、眼で見た限り、男達は、キエンベ王国のLV1の兵士で、女、子供は、エンデュアル王国のLV1の市民であった。うん、情報が少なすぎて正確には判断できんが、兵士達が、市民から、物理的な物だけでなく、人としての尊厳までも略奪していることは明らかだ。はつきり言って、状況が正確にわからないのに首を突っ込むべきではないとも、俺自身が、略奪をしているこいつらを、裁けるような人間だとも思わないが、うん、こいつらのやっている事がっ！人として、いやっ、日本人として！到底っ、見過ごすことができない所業であるということだけは確かだっ！だからこそっ、愚策であろうとも、ここは感情に任せる事にするっ！

「ぐえっ」

「ふぎゃっ」

「やむちゃー！」

ああ、感情に任せたとっても、殺してはいないよ？だって、俺としては、こいつらに恨みなんて一切ないしな…ただ、眠ってもらっただけだ。で、回復薬を、死にかけの市民やらに使ってやって、比較的、無事な奴らに情報を聞くことにした。

「おい、あんた、何があったかわかるか？」

「えっ？えっ？あ、あたし？」

「そうだ、何かわかるか？」

「えっ、えっと、い、いきなりっ、火が回って、き、気がついたら、あ、あの人達に襲われて…ぐすっ、あう、ご、ごめんなさい」

「他にっ！何かわかるやつはいないか!？」

「は、はい…わ、私が…その兵士達がつけている鎧は、確かマヤト皇国の鎧です。なので、もしかしたら、マヤトが、同盟を裏切って攻めて来たのかもしれませんが。」

「まさかっ！マヤトに限って！」

「そんなっ！ありえないっ！」

マヤト？キエンベじゃないのか？うーん、しゃあねえか…部隊長ねえ、コイツでいいか…

「おい、起きろっ」

パシッパシッ

「ん…うあ!？」

『スキル…弱者への威圧が発動しました。これにより、自身より弱い存在が弱体化されます。』

「いいか？これから俺がする質問に正直に答えろ。いいな？」

で、わかったことは、やはり、こいつらはキエンベ王国の兵士であつたらしい。うん、なんか、エンデュアル王国を滅ぼすために立てられた、綿密な計画を実行に移している途中だったらしい。まあ、俺には関係ないけどな…でも、一般市民の皆様方は怒ってらっしゃるな。そりゃあそうか、自国の事だもんな…しかも、もう、この王国の王族は、一族郎党皆殺しにされ、滅亡は確定的らしい。どうやら、相当、国民に好かれていた王だったようで、それを知った一般市民の皆様は、当然ながら兵士を殺そうとした。…まあ、止めたけど…めんどくさい事に、なんか、騎士風の格好——といっても、ロボロ——をした美女と、俺のいざこざに発展した。

「あなたもっ、エンデュアル国民ならっ、わかるはずですっ！どいてくださいっ！」

「いや、俺、エンデュアル国民じゃないし…」

「なっ！まさかつ、キエンベの人間ですかっ！」

「いやいや…なぜ、そうなるし？…極東の日本という島国の出身だよ。」

「じゃあっ、なぜっ、邪魔をするのですかつ、あなたにはっ、関係ないでしょうっ！」

「はあ… 落ち着けえ！！！」

「ひっ…」

「どうだ？少しは、落ち着いたか？」

「は…はい」

で、俺としては、今、この場で、この男達をあんたらが殺すことが俺の意志に反するということを、懇切丁寧に教えてやったんだが、まだ納得できないみたいだ。

「例えっ、例え、そうだとしても…それでもっ、私は！王のっ、国のっ、仇をとりたいたんですっ」

「はあり、俺としては、逃げてほしいんだがな…それにだ、逃げた後に、復讐をすると言うのなら、俺は止めないぞ？もちろん、協力もしないがな…」

「？、なぜ、今はダメでっ、後ならいいんですかっ？意味がわかりませんっ」

「あり、なんつゝか、後ならさ、あいつらも抵抗できるし、あいつらが、あんたらの、恨みを買うような行いをしたのは事実だろ。そこらへんは、あいつらが背負うべき責任だとも思うしな。まっ、自業自得でしょ。よくするに、俺の目の前で、俺の気分が悪くなるような事をするな！っていう、俺の、我が儘だろうなあ…」

じっ…

「……はあり、ええ、わかりました。助けられた恩もありますし、あなたは、自分の意志を簡単に曲げるような人間ではなさそうです。ここは、私が引きまします。」

「へえゝ、あんた、思ったより、物分かりがいいんだな…それとだ、わかってくれて、ありがとな」

プイッ

「あんたではありません。エレナ、エレナⅡイーストウッドです。」

「ふうん、よろしくな、エレナⅡイーストウッド、俺は天野 徹。呼び名は、徹でいい。」

「そうですか…よろしくお願いします。トール…さん」

「んじゃ、逃げるとするかあ…っと、その前に、あんたかも、その格好をどうにかしないと」

「「「あっ……」」」

はあ、なんとか、街から抜けさせた。ちなみに、市民の人達が、持ちきれなかった略奪品は、ちゃっかり頂きました。んで、配下を数人、街に送り込んで、あの後、すぐに街から出た。脱出後、一刻もしないうちに、街が完全に偽マヤト兵士に包囲されていたので、ぎりぎりだったけどな…今は、近くの森に隠れている。

でだ、今から、救出した市民、100人以上は確実にいる。――逃げる途中にも、市民を救出したので、結構増えた――を、マヤト皇国まで、送り届けることにした。なぜ、行き先がマヤト皇国かというと、女騎士の案だ。単純に、周辺国で一番信じられる国であるから。で、エンデュアル王国が滅亡したため、領地内の、各地の村や、街が略奪を受ける可能性があること、そして、このキエンベの工作をマヤト皇国に、伝えたいかららしい。うん、めんどくさいから、やりたくないんだが、まず、この世界の人間社会などの、情報がほしい。――悲しいことに、そういうのは、眼でみてもわからない、

なんというか、世界の理とか、個人情報とかはわかるんだがなあ――そして、せっかく、助けた人達を途中で、ほっぽり出すのも、しように合わないし、後、なんつうか、俺の予想では、キエンベからの追っ手がくると思うのだ。いや、確証はないが……あいつら、結局は、街の人を、皆殺しにしようとしてたんだよな。街を出た後に、偵察に出した配下の報告では街道の先に潜伏している部隊な

どがいたらしい。うん、命からがら逃げだした市民を殺すための、二重の罠みたいなもんだろ……実際、この森に逃げ込めたのは、偏に俺の能力の高さにより、兵士に見つからないように動けたからにすぎない。で、例え、あの男達や脱出中に市民を救出するときに気絶させた奴らが事実を隠蔽する――スキル…忘却を発動済みだから、実際に、俺達の事は忘れているので、事実を話そうにも話せない――としても、生き残りがいることがわかる可能性が高いと俺は思っている。うん、危機感をもっておくべきだろう。まあ、守り抜くのも、送り届けるのも、あの兵士達の力量だったら片手間でできるし、よさげな土地が見つかるまで、旅をするのもいいだろう。

んじゃ、市民の人達も、眠ったし、球に入って、チートと、にやんにやんでもするかね。うん、あそこの、木の陰にでも行って球に入るかな……

「何処に行くのですか？」

「うおっ、なんだ……エレナ……イーストウッドか……そっちこそどうしたんだ？こんなところで？」

「エレナでよろしいですよ。ツール様」

「様って……いきなり、なんなんだ？」

「気づいておられるんでしょう？このまま無事に、私たちが、マヤト皇国に辿り着けるわけがないと…」

「へえ…やっぱ、あんたもそう思うか…で、なにか話でも？」

「ええ…そうですね…」

私自身が代価になります。どうか、私達を守っては貰えませんか？」

「はあ？いやいや、何を言ってるんだ？そもそも、俺一人で、全ての市民を守れると思ってるのか？」

まあ、守れるだろうけど、フェイクだよ…やはり、実力は隠しておきたいだろ？それに恩人でもない人間に実力を教える必要もないし、頼られまくられてもめんどくさい。

「そんな都合のいいことは、思ってはおりませんっ、ですがっ、あなたは強い。キエンベに復讐をするまで私は生きなければならぬのです。私の、身体程度で、あなたが束縛されるのなら喜んで身を捧げます。」

「はあ、もし、俺がやり逃げしたらどうするつもりだ？」

「うっ、…か、考えていませんでした。」

「あのさあ、お前の体なんか貰わんでも女には、ことたりてるよ。それに、もとから、マヤトまでは、面倒をみるつもりだ。やっぱ、きちんと助けきらんと寝覚めが悪いだろ？後だ、様はやめろ」

「そっそれでは！」

「ああ、安心しろ」

「？、では、何処に行かれるのですか？」

「狩りだよ。狩り、夜のハントだ。食糧が少ないだろ？」

まあ、獲物はチートという名の、女豹だな：

「私もいっしょ——」

「いや、邪魔だ。一人で寝てろ。」

いっしょって：お前は痴女かつ！そんなプレイは望んでおらんわっ！

「そうですか：

「あ、ああ、俺は、行くぞ」

「はい：

ああ、まじで、長い一日だ。なんか、すでに、塔の中が懐かしいなあ：ハハ

うん、早くチートの所に行って、慰めてもらおう。

九話（前書き）

本日二話目です。

話に筋をしっかりと通せるか心配だ…

九話

あれから、六時間くらいがたったか？ただいま、俺の上でチートが淫れまくっております。うん、絶景。絶景。で、他の配下はというと、球に吸収した火山滞で鉱石と宝石の採掘と精製、森で、果樹や他の植物の生育に料理の研究、それと、子育てと、訓練だ。訓練について、配下同士での模擬戦とかだな：なんつか、塔からでたら、モンスターを倒しても力が吸収されなくなり、アイテムも落とさなくなった。困った事に死体も残るようになったんだが：同種のデーモンズドラゴンの死骸をゴークンが、うまい、うまい、と食べる様はとっても、衝撃的だった：

それと、俺がチートに慰められている間の見張りに出していた、デーモンからの報告では、やはり、生き残りの搜索隊らしき奴が森に入ってきたらしい。スキル・幻影でなんとか騙くらかせたらしいが、全ての痕跡までは消せていないだろう。後、火事場泥棒に出していた奴らが帰ってきたんだが、なんか☆品を持って帰ってきていた。で、そいつらの話では、街では兵士達が相当混乱しているらしい。そりゃあそうか、せっかく集めた略奪品がいつの間にか消えてるんだからそうなるわな。ご愁傷様です。

そして、そろそろ夜明けが近づいているのでチートと温泉で汗を流した後、助けた人達が寝ている森へ行くことにした。うん、チートとの別れは名残おしいな：

さあっ、行ってくるか。

着いたんだが、まだ、ほとんどの人が寝ていた。まあ、当たり前か

：しかたがないので、あらかじめ、狩って保存していた、鹿に似た生き物――解体作業済み――の肉を取り出して朝飯を作る事にした。ふふふ、迷宮で鍛えられた俺の料理スキルをとくと見よっ！

ふう、今、俺の前で、鹿肉もどきで作ったスープが湯気をたてている。うん、実にうまそうだ。百人以上いる人達に配れるようになっての量を、ほとんど一人で作ったのだ。一品だけ？とかいうやつは馬鹿だと思う。そこで、重大な事実に気づいた。スープを入れる器がないのだ：いや、指輪に収納して、持ってはいるが、いきなりなにもない所から出すのは不自然すぎるだろう。――スープは、なんか救出した人が持ってきていた大釜で作った。こんなこともあるのかと。と思い持って来ていたらしい。笑顔がやけに眩しかった。――うん、これも持って来ていた人から回収した器による回し飲みでなんとかなった。で、今は下味をつけた、鹿肉もどきを、熱したでかい石の上で香菜と一緒に焼いてふるまっている。

「おいしい…ぐすっ」

「ママー、おかわり〜」

「ま、負けた…」

ふふん、あんたらの何千倍もの器用さを持つ俺が丹精込めて作ったのだ。そりゃあ、うまかうて。せいぜい、それでも食って元気をだしやがれ。実際、せっかく助けだしたのに、自殺したやつもいたんだ。あんな、人がやるとは思えない所業を受けたなら、しかたないかもしれないが、死体をみるなんて胸糞悪いもんだ。他の奴には、旨いもんでも食って、早く立ち直ってほしいもんだ。でだ、食べ物に充分に回ったので、いつの間にか、市民代表みたいな存在になっている。女騎士と、色々話をすることにした。どうやら、マヤト

皇国つつのはエンデュアル大陸——今いる所だ、眼で見たところ
広さ的には、ユーラシア大陸ぐらいあり。肥沃な大地と鉱物資源が
かなり眠っている。——の東側の沿岸部と大小様々な諸島を納めて
いる海洋国家らしい。だから、キエンベ対策も兼ねて、街道ではな
く近くにあるという、ナウド川沿いに海まで下っていくことになっ
た。といっても、全ての人から賛同を得れたわけではない。やはり、
王国が滅亡したことで、略奪なんて起こるわけがない、と思っ

ている人間もいるわけだし……それに、近くの町や村に知り合いや親
族がいるので、そちらに身をよせたい、又は、無事か確認したいと
いう人が、多々いた。きちんと、狩りをする過程で、街道に張って
いる兵士を見たと言明もしたし、女騎士も危険だと説得をしたんだ
が、聞く耳をもたなかった。そのため、女騎士についてくる人間と
町や村に戻る人間で分かれることになった。一応、説得はしたし、
隠れながら進むということも、捕まっても俺達の情報は漏らさない
ようにすることも——また、分かれる時に、スキル…忘却を使いま
す。——確約させた。俺にできることはしたつもりだ。うん、そこ
らへんの判断は自己責任だろ。ただ、バカヤローばかりだ。こん
ちくしょう。

あれから、全体の半分くらいの人女騎士について行く事になった。
で、今はというと、船に乗ってナウド川を下っている。なんつつか、
救出した市民の中に、ナウド川の船着き場を管理している商人が居
り、みんなを船に乗せてくれた。まあ、少しだけ、金は取っていた
が……さすが商人、ちゃっかりしてる。それにしても、これだけの船
を作るなら、結構、技術的には進んでいるのか？あ、でも、川
を、上る時は人力による引き上げのようだから、そうとも言えない
か……んで、暇になったんだが、ちと、めんどくさい事に、冷静にな
っ、た女騎士に色々と問い詰められている。まあ、そこそこに怪し
いから俺、決定的だったのが、回復薬だ。実際、死にそうな奴ま

で回復しちまったから、おかしいわな：なんか、あれは神器ではないのですか？と質問されたのだが、神器？なにそれ？となってしまうのがやばかった。なんつくか、今から、千年ほど前に、始祖王アルタイヤがエンデュアル——塔の事ね——に認められ、塔に入り、塔からいくつかの神器を持ち出してきたらしい。で、その

神器と超人的な力を使い、エンデュアル王国を建国し、エンデュアル大陸を統一した。というのは、どんな馬鹿な餓鬼でも知っている話なのだそう。うん、知るかつつの。こちらら、違う世界出身じゃ、ボケエ。

だがまあ、なんとか、ごまかした。神器は俺の地方では宝具と呼ばれ、うんたらかんたらで、あの回復薬は、キエンベ兵士から奪った物だ。と、よどみなく言ったら納得した。ふっ、ちよろいぜ。十年前ならいざ知らず、今の俺のINTをなめんな。で、塔に認められるつっくのはだ、アルタイヤ以外に塔に入れた奴がいらないからだ。なんか、入れたと思った瞬間には、外にいるらしい。だから、入るには何かをして認めさせるしかないと言われているみたいだ。いやいや、普通に、俺は入れたし？意味わからん。どうして？まあいいつか。ところで、神器って、火事場泥棒をしてきた配下が、持ってきた☆品じゃなかるうか？、うん、俺、しくらないっ。あとは、スキルというものは一部の人間にしか使えないらしい。あまり、派手なのは使わんようにしよう。

それで、三日くらい川を下っていたら、川の淵の地面に、大量の死体が打ち上げられていた。んで、眼で見てもみると、LV1のマヤト兵士の死骸の山だった。女騎士の憶測になるのだが、マヤト皇国がアルタイヤ聖誕祭に、多くの兵士と贈り物を送るのは、十年に一度の伝統行事なのだそう。で、その道中に襲われ、キエンベ兵士と入れ代わったのではないか？という話だ。うん、ありえる話なのだろう。でだ、驚いた事に、大怪我をしているが、生き残りがいた。

眼で見た限り、LV1のハイヒューマンの青年だ。どうやら、マヤトの王子様らしい。つか王子様がハイヒューマンってどういう事だ？

うーん、聞けばわかるか……まあ、そういう事で、女騎士に、実は、隠していた的な事をいい、王子様に回復薬を使ってやることに……目覚めんなあ……浣腸でもしてやろうか？このっ、くそイケメンがっ……

うん、王子が目覚めんまま、海の船着き場に着いた。ここからは、海沿いに徒歩で進むことに……ああ、王子は俺が背負っているよ。こいつまじで、軽いわ。しかたないから、起きたら飯を吐くまで食わせてやろう。いやなに、ただの好意だよ。はっはっは。

でで、起きたんだが、気が動転していたのだろう。起きた瞬間に俺に攻撃をしてきやがった。んで、それを、振伏せてやったんだが、それが、まずかった。なんというか、ハイヒューマンは、やはり特別なようだ。約七百年前になるんだが、アルタイヤが死去して、百年内乱というものが、勃発したらしい。んで、それを納めたのが、救世七英雄というアルタイヤの子孫達だったそう、それで、そのうちの一人が、マヤト皇国を建国したらしい。んで、その、アルタイヤの血筋の人間は、超人的な力を持つらしく、こいつもそれを受け継いだため、今まで圧倒的な負けを人に対して受けた事がなかったそう、川で死にかけていたのは、橋を渡っている最中に、橋が落とされたかららしい——そのため、俺への弟子入りを志願してきた。もちろん、いやだ！、と切って捨ててやったよ。でも、諦めきれんようでしたっけいから、お前の国、大変なんじゃね？と話を变えてやった。最初は、意味不明だったようだが、女騎士が懇切丁寧に、エンデュアル国王にその一族郎党が、マヤト兵士に紛した、キエンベ兵士により害され、エンデュアル王国は滅亡した。と聞かされたら、途端に顔色を変え、走ってどっかに消えていった。俺も、女騎士もポカーンである。んで、普通に行軍していたら、一日くら

いたって馬車がきた。

その中には、王子がおり、俺と女騎士を王城に招待して、詳しい話を聞きたいそうな…いやいや、俺はいいよ、といったんだが、恩人であり、師匠ほどの武人を厚くもてなさないで、なにがマヤト人ですかつ！と力説されてしまい、何故か馬車に乗ることに。ドナドナである。

チート…助けて…

十話（前書き）

感想がたくさん来ていてびっくりしました。

厳しいご指摘もあり、色々と反省しなければならない部分が多々ありますが、少しずつ修正しながら続けていければな、と思っております。

これからもよろしく願います。

最後に、感想を書いてくれた皆様に感謝を：

十話

あれから、馬車を半日ほど走らせて、海辺のそこそこ大きい街に着いた。他の市民の人達は、馬車に乗っていた数人のマヤト兵士さん達に任せた。

で、馬車の中で色々と話をして、女騎士が助けた青年が王子だったと知って——いや、嵐のように去っていったし、聞く暇も言う機会もなかったのだ。

各国にアルタイヤの血族はそこそ居るらしく、王子だとはわからなかったらしい——驚いていたが、同時に安心もしていた。

なので、キエンベからの追っ手などをもう心配せずともいいのだろう。——実際は、確保した神器を奪われた事による混乱十川を船で下ったことによる時間短縮、そして、近くの町や村に行った市民が、期せずして囹になったために、こちらにはなにも起こらなかったのだ。

うん、あの女騎士の覚悟はなんだったのか：世の中とは虚しいものだ：——

それにしても、王城というから、もっと立派な物を想像していたのだが、ここにくる道中に見た民家より確かに立派で目立ってはいるが、えらく質素な和風の屋敷だった。

うーん、建築技術はそこまで進んでいないのか？

だがまあ、手間もかかっていないようだし、このくらいの王城の方が好感をもてるか。

やはり、民から搾り取った利益で豪遊している権力者に対して、いい感情はもてんしな：

しかし、王子が許可も出していないのに、師匠よばわりしてくる、

俺達を迎えに来たはずの馬車の中で寝る、などの行為をしたせいで、マヤトに対しては悪感情の方が強いんだよね：

などと、そんなことを考えていたら、王子と侍女さんに案内されて畳の部屋に通された。

王子様は金髪に碧眼の白人なので、違和感が半端ないな。

とか思っていたら、女騎士は普通に座敷に座り、正座したので少し驚愕しながら俺も座ることにした。

なんか王子はその間にいなくなっていた。

で、奥から、ダンディな白髪碧眼のあごひげ爺さんが出てきて、話をし始めた。

「ほっほっほ、客人よ、足は崩してもらってかまわんよ。それでじゃ、王都エンデュアルでなにがあったか聞きたいのじゃが、よろしいかの？」

「はっ、王都エンデュアルでは――」

ところで、この爺さんにこんな話をして、はたして意味があるのか？いや、眼で見たんだが、この爺さん、なんの要職にもついていないんだよね：

まあ、ハイヒューマンだし、名前的に王子と同じ王族だから問題ないのか？

「ほう、キエンベの兵士のう：

やはり、恩を忘れおったか：だから言ったのじゃ、馬鹿息子が：と、すまぬの。

考え事をしとった。

それでじゃ：

おぬしは何者かのう？」

へえ、…中々の威圧感だ。うん、前言を撤回しよう。

この爺さんなら的確な判断ができるだろう。

まあ、威圧感的にデーモンズドラゴンには到底及ばんが、この爺さんが俺には想像もできんほどの、苦楽を乗り越えてきたという年季を感じさせるには十分だ。

うん、絶対に十年前だったら焦って、なにがしかのボロを出していたな…だが、どうやって答えようか…下手な嘘は、この爺さんにはたぶん通用せんだろう。

「そうですね…私としては、あなたをまだ、信頼も信用もしておりません。

なので、その質問には答えかねるのですが…

…どうでしょうか？」

「ふむ…儂としてはそれで一向に構わんのじゃが、マヤトとしてはそうはいかん。

孫を一瞬のうちに倒せるなどという武人を捨て置くなどということではできん…それにじゃ、孫の師匠となる人物の素性はしっかりと把握せんといかんじゃろうて…

…どうしたもんかのう？」

「はあっ？ いやいや、師匠になる気など一切ないのですが…それに、この国への用事はもう終わりましたし、それほど、私を危険視するのであれば、すぐにこの国を出しましょう。」

「ほっ！？ 孫は師匠ができたと手紙に書いていたんじゃ違ったの

かの？

それにじゃ、素性が怪しい物じゃとしても、孫の命の恩人じゃ、やはり、それなりのもてなしはせんと、マヤトの名が廃るのじゃがな…」

「…ふむ、師匠云々はお孫さんの思い込みです。私は了承しておりません。

それと、私に構うより、これからのキエンベ側や周辺諸国に対する対応に努めるべきでしょう。

もしも、私に恩を感じるのであれば、エンデュアルの難民の方々への支援と、そのエレナ・リーストウツドの支援をすることが、私の恩に報いる事になるでしょう。」

「トールさん…」

「ふむん…残念じゃがおぬしの言っていることはことごとく正しいようだのう。

実際に、キエンベは、マヤトがエンデュアルを滅ぼしたとして、先日、マヤトの支配からの独立を宣言しおったわ。そして、周辺諸国特に、トルケ王国は、マヤトからの解放として元エンデュアル王国領に進軍する用意をしておるらしいの。まるで計ったかのように動きよるわ。全く忌ま忌ましい。」

「では…」

「じゃが、マヤトとしては、エンデュアルの難民は、無実の証明としても手厚く受け入れるつもりじゃったし、そこのお嬢さんも孫の恩人じゃ、言われんでも支援はするわい。そうするとじゃ…おぬし

に恩を返したとはとても言えんのじゃよ。それにじゃ、儂は隠居の身、おぬしの心配するような各国への対応などなにもないわい。」

「……」

「トールさん：マヤトの人はとっても頑固なのです。ここは素直に好意を、受け取ってもよろしいのではないですか？」

「カッカッカツ、『受けた恩は地獄へ行っても返しなさい』、マヤトを建国した。ケルタⅡマヤトの言葉じゃて。

ここで恩を返せねば、孫は一生を賭けておぬしに、なにがしかの恩を返そうとするじゃろう。」

はあ、と言う事で、結局、何泊かする事になった。

うーん、能力的には勝っていても、やはり経験の差というのは否めないな：なんか上手く、言いくるめられた気がする。

まあ、少しくらいなら泊まっても大丈夫だろう。

で、色々と持てなしてくるそうなので、待っている間、爺さんと話をしてみたら、此処は王城と言っても、大陸側の別邸的なもので本城は違う所にあり王様は本城の方に身をよせているとか、爺さんが昔はマヤトの王をしていたとか面白い話を聞いた。

「こ、これは！…」

小粒ながらも一粒一粒が純白の輝きを放ち、調理しだいで如何様にもその姿を変える。

それはまさに日本人の魂といえる食物であろう。

そう“米”が夕食時に出たのである。十何年ぶりの米をマジ泣きしながら食べる俺に、女騎士とマヤトの面々は引いていたらしい。

でだ、食事をした後にきちんと王子と話をしたんだが、やはり、俺に師匠となつてほしいそうな。

まあ、それを諦める事が俺への恩返しになる。と言ったんだが、泣いたのだ。

うん、見事な男泣きで、わかりました。

と言う姿は、今までの嫌悪が憐憫に傾くに充分なものだった。

なので、師匠にはならんが少しくらいなら色々と見てやる。と言ってやった。

すると、今度は嬉し泣きをしていた。

なんつーか、忙しい奴である。

その後、畳の寝室に通され十何年ぶりに、まともな布団で寝たんだが、やはり、文明の発達による産物というのは改めてすごいと思う。こういうのもチート達に作ってみるかとか、そんなことを考えていたらいつの間にか寝ていた。

次の日、朝食を食べ終えて、敷地内の広場で王子と立ち合ってやることにした。うん、LV1にしては平均8と基本ステータスも高いし、体術や剣術などのスキルのLVも2や3ばかりだ。

はつきり言つて、俺より武術の技術的な面では、上の部分もあるだろう。

ただ、俺には、塔で鍛えた圧倒的な能力がある。

実際に、立ち合いは赤子の手を捻るようなものだった。

そして、王子を眼で見やり、能力やスキルの効率的な訓練方法を具体的に教えてやった。

確かに、この訓練をやれば、短期間でも能力はきちんと上がるだろ

うが、塔での力の吸収が一番効率的なんだよな……うん、王子は俺に感謝をしてきているしどうでもいいか。

で、この後は王子の訓練を見るだけで暇だったので、立ち合いを見に来ていた女騎士にも少し手ほどきをしてあげた。

まあ、分かれる前の餞別みたいなもんだ。

訓練が終わったので、俺が作った装飾品を、それとは知らせずに爺さんに見せに行ってみたんだが、買おうと思ったたら国が傾くほどの代物だ、と言われた。なんというか……やっぱり、自分の作品が高評価を受けるというのは素晴らしい事だな……と再認識した瞬間であった。

そんなこんなで、居心地が良すぎて十日ほど滞在してしまった。

この間に起こった事といえば、

エンデュアルの土地でトルケ王国とマルゲン連合王国の戦端が開かれ、それにより、マヤトの近くに住んでいたエンデュアルの国民が押し寄せた。

マヤトは、無実の証明のため、エンデュアルの土地に出兵はしていないので、こちらに來た人間と南のヤユダ商業連合国の方に渡った民が多かったらしい。

女騎士と王子が、キエンベの平定もしくは、難民の救出——マヤト兵士に紛した馬鹿が難民に虐殺と略奪を繰り返してるらしい、そのため、苦汁の決断だがエンデュアル側にも派兵をすることになったらしい——に出兵した。どうやら、女騎士は王子に頼みこんで王子の部隊に編入されていたらしい。

別れ際にいつか恩を返しに行きます。と言われた。そんなのいらんのに……

爺さんが隠居の身から国王の相談役的な立ち位置にかわる。

事態が急変しすぎて国王に泣きつかれたようで、これから本城に行くみたいだ。

つつー所だ。で、俺はというと、宝石などを売ったお金で、――なんとするか、エンデュアルでの略奪品の中にもお金はあったのだが罪悪感が少しあったので、使わなかった。

エンデュアルの難民を、いつかこの金で支援でもしよう――のんきに街の市場で各種の野菜、果物、穀物などを買い、爺さん達に頼んで織物や建築などの各技術者の元で色々と見学していた。

実に有意義な時間であった。

で、なんか爺さんも忙しくなってきたので、そろそろ、出ようとしたんだが爺さんに止められた。

うん、この十日間で技術者達に現代的な観点からのアイディアの提供やら、王子達へのちょっとした指導やらを見て、俺は得難い人材だと認識されていたようで、素性も問わんし給金も言い値で払うからマヤトに仕えないかと問われた。

実際の所、たった十日だが、爺さんや王子に街の人達に対して俺は結構な好感を抱き、日本に似た所がよくある、マヤトと言う国を好きになっていたようで悩んでしまっている。

うん、どうしようか：

十一話（前書き）

本日二話目です。
楽しんでくだされ。

十一話

「申し訳ありませんが、私はマヤトに仕える事はできません。」

「そうかの…やはり、どうにもならんのかのう？」

「ええ、ですが違う形でマヤトに協力はできるかと…」

「ほっ？、どういふことかのう？」

という事で、爺さんに、俺が塔から帰還した人間だと言うことを話した。

まあ、最初は半信半疑だったが、俺の超人的な力の一端と迷宮内で取得したアイテムや一部の配下などを見せたら一応は信じてくれた。ああ、勘違いしないでくれ、重要な事実——特別なスキルやチートやゴーくんの事など。

というかチートを見せたら、国を巻き込んだの争いとか起きそうで怖い——は、一切話していないし、爺さんが変な行動をとるならスキル…忘却を使うつもりだった。

それに、この短期間で全面的に信頼したわけでもない。

まあ、信頼してもいいかな？程度には思っではいるため話したんだが…

それで、爺さんに、俺としては戦などに関わらず、何不自由なく悠悠々自適に趣味に没頭しながら生きるのが望ましい、趣味というのは、物を作り、その作った物を使ってもらう、もしくは食べてもらうことで喜んでもらう事だ。もちろん、無償で渡すなどという慈善活動をして市場を破壊する気もない。

そして、俺には土地があれば大量に食糧品を生産できる神器があり、食糧を一月もしないうちに大量に安価で卸すことができるようになる。

マヤトとしては、難民や周辺国の対処で大量の食糧が必要になるはずだが、トルケとマルゲンの戦などのため、今は食糧の値段が高騰している。――市場に果実などを買いに行った時に知った――だから、未開拓でもいいし無人でもいいので、マヤトと交易でき、俺が領有をしてもよい土地を教えてほしい。そして、その土地の領有を認めてくれるのなら食糧を安価で卸す事を約束する。

それに、マヤトとしても、俺とのつながりができるのは悪い事ではないはずだ。と提案した。

で、爺さんかというと、そんなに悪い提案だとは思っていないようだったが、王や宰相と話をしてみたいとわからんそう。

まあ、当たり前だろう。で、数日かけて爺さんと本城に向かうことになった。

どうやら、本城は諸島群の中央付近にある島に据えられているようで、島に積み荷を届けるという、大型の帆船に乗って行く事になった。

初めて、帆船と言うものに乗ったが、意外と速く動き、何事もなく島に着いた。

帆船の積載量もそれなりにあったので、この国の、造船技術は高いようだ。

これなら、もし島を領有したとしても、輸送が困難になるということとはなさそうだと安心した。

で、王城のある島に着いたんだが、活気のある市場が広がっており、

キエンベの平定やエンデュアルへの派兵があるということを感じさせないものだった。

王城はというと、あの別邸とそこまで変わりはなく、なんか拍子抜けしてしまった。

で、王と宰相がいる部屋まで案内され話をすることになったんだが…まずは、塔からの帰還者だという所で躓いた。やはりそんな与太話は信じられないみたいだ。

「父上！この国難の時にこのようなペテン師の言葉を信じてどうしたのですか！」

「このっ！馬鹿息子がっ！」

こやつは孫の命の恩人じゃぞっ！

それをペテン師などと言いおってからにっ！

そもそも、儂の言を無視して行った国策により、今の国難を作ったのはおぬしじゃぞっ！」

「っ！？それは…」

「はあ…叔父上殿。

それは、本人が一番わかっていますよ。

客人の前です。どうかお怒りを鎮めてはもらえないでしょうか？」

「ふむ…

宰相の言うとおりじゃの。

トール殿、すまんかったの。」

「いえ、私は別に…

それより、お二人とも私が帰還者だと信じきれていないようですし、まずは、それを証明しましょう。」

で、☆品を見せたりスキルを使ったりと色々見せてやったら。一応は信じてもらえる事になった。

そして、俺の考えていることを話し、意外とすんなり事は運んだ。実際、マヤトに取ってもメリットはある話だったし、俺が最初から譲歩をしていたのだから当然か：

俺が領有することになったのは、マヤトの南東に位置する島だった。

なぜ、此処になったかというと、

俺自身が配下を使い土地を開墾させ神器を使う環境を整えなければならんが：配下は人と違う容姿をしているため、交易に来た人が受け入れられないだろう。

なので、配下達をその土地に元からいた原住民族であり人間に協力的だとして。

そして、そのような事は大陸より、島の方がやりやすいので、できれば未開拓の島がありがたい。

海流と風の関係で意外と簡単に、行き来でき交易が用意に行える。マヤト側としても、その島を開拓し領地化する時間も資金もないので都合がいい。

と言った理由だ。

で、島に下見に行く事になったんだが、船で行くのがめんどくさいのだ。

なので、空を飛べる神器があるので位置さえ教えて貰えば一人で行けます。と言って出てきた。

その時、なんか王様と宰相が焦っていたような気がしたが気のせい

だろう。

それに、実際は、そんな神器は持っていない。

ただ、スキル・幻影を使い、ゴーくんに乗って行くためのまかせだ。

はつきり言おう、地上に戻ってからこれまでやれなかったが、ずっと、この広い大空をゴーくんに乗って駆け回りたいと思っていたのだ！

ふはははは、夢が一つ叶うぜ！

で、ゴーくんも最初は楽しそうに悠々と飛んでいたのだが：

「ちょっ、ゴーくん落ちる！落ちるって！！」

うっうおおおお！！」

うん：楽しすぎて暴走したみたいだ。

なんか、急降下や急上昇にループなど色んな技を披露してくれたのだが：

ただただ、怖かった。

どうやら、俺に楽しんで欲しくてやっただけから怒るに怒れんが一言！言わせてくれ：死ぬわ！！！！

はあ、そんなこんなで、なんとかかそれと思わしき島に着いた。

うん、眼で見た限り大きさは四国の四分の一くらいで、塩山や鉱物資源などもあるようだ。

うん、中々いい島のようなのだが、王城を飛び出した時、王様と宰相が

なにか焦っていたように見えた理由がわかった。

この島に人が出入りしている痕跡があり、近くの島などで聞き込みなどをして調べて見ると、この島は海賊の根城になっているようなのだ。

俺が少し調べただけでわかる事なのだから、王と宰相側は知っていたのだろう。

まあ、イラッとはしたが、俺にとっては海賊など些細な問題だ。

なので、王城に戻りあの島を領有する事を了承した。

その時、爺さんと王様と宰相に、あの島が海賊の根城になっている事を知っていたかを確認した。

やはり、爺さんは知らなかったようだが、王様と宰相を問い詰めたら、知っていたようで、それが、爺さんの逆鱗に触れてしまい、しばらくの間、二人してマヤト人とはなんたるかを説教されていた。

うん、一応はこれでチャラにしてやろう。

で、俺はあの島の開拓に乗り出すことにした。

はつきり言って、海賊に対して恨みはないが、これから開拓するにしても邪魔にしなければならないので、廃除する事は決定だ。

「グオオオオオ！！」

「うわあああ！ド、ドラゴン！？」

「に、逃げるぞー！！」

「くそっ！もたもたすんなっ！早く船をだせっ！」

「ああ、アルタイヤ様、お守りを…」

うん、喋らなければゴーくんの迫力は凄いからな…どうやらほとんどの海賊が大小様々な帆船に乗って島から脱出したようだ。

だが、これから安全に交易をするためにもこのまま逃がしはしない。スキル…幻影を駆使して、マヤト海軍の駐留している島へ海賊たちを誘導した。

そして、幻影を操作し海軍側に助けを求めるようにした。

海軍側からしたら、なにもしていないのに海賊達が勝手に捕まえてもらいにきたようだっただろう。

これでは、海賊達の証言などを信じる者など誰もいないだろうし、俺としても、別に恨みもない海賊達を殺さずに済んだので万々歳だ。それにしても、海賊達がゴーくんに驚き逃げ惑う様や、海賊達の愚行に戸惑う海兵達の反応は痛快だった。

ゴーくんもなんか胸を張っているし、また、やりたいな…

で、島に残った海賊達は縛りあげて、スキル…忘却により、記憶を改竄して海軍側に引き渡したので全く問題はない。

それじゃ、海賊もいなくなった事だし、この島の開拓を初めましようか!!!

十二話（前書き）

なんか日間ランキング一位を一時期とっていて眠れませんでした。

なので書きちゃいました。

今回は少しシリアス？入ってる？

十二話

あゝ…

勢い込んで開拓を始める！！！！

とか言っただけいいんだが、俺が海賊達をふん縛り海軍に届けてる間——ゴークンに乗って海軍の駐留している島に行き、幻影で船で来たと騙した。事情聴取？即退却である——に島や海賊のアジトなどの探索を命じていた部隊に問題が発生していた。

なんというか千人規模の海賊団だったようで、その、なんだ？

海賊のアジトに下のお世話をするための捕虜とかが、わんさかいたんだわ…

うん、もしかしたら大型の海賊船にも、捕虜が乗っていたかもしれないかったな、安易にゴークンに破壊を命じなくてよかった。

それにしても、捕虜の中には海賊の遊び物にされたのか部位の欠損や精神が壊れている人などがおり、本当に気分が悪い…

俺にはこんなことを平気でやれる人間の精神なぞ一生わからんな。

っと…よく考えたら、俺自身も召喚したモンスターに同じような事をしてるようなものなので、海賊達とそう変わらんのかも知れんと思う、その後、少し感傷的になってしまった。

まあ、感傷的になっても事実が変わらんので対処をしなければならぬ。

で、死にそうな人達から回復薬やスキル…治療などを使って治療を行ったんだが、

おかしい…

部位の欠損が治らないのだ、塔の中では確実に治ったのになぜだ？
眼で見もしたんだが、やはりわからないため色々試してみた。

結果はこんな感じだ。

いくら回復薬や治療を行ったとしても欠損部位の患部部分に体力などが回復する。

寿命が伸びる効果のあるアイテムを使ったら少しだけ欠損部位が再生した。

そのため、生命石ならばと思い試してみると、限界LVが上がった瞬間に欠損部位が急速に再生したのだ。

このことから、限界LVが上がれば塔の外でも完全に回復することがわかった。

だが、どういうことだ？

これは、確実に今見ているこの世界の理に反している。

いや、そもそもあの塔の存在自体がこの世界の理に反している。

そう、もっとこの世界の理は俺がもとの世界で学んだ世界の理に近いはずだ。

……

ふう……考えてもわからんもんはわからんか。

だが、俺はもしかしたらただ便利だけじゃなく、もっと厄介なス

キルを手に入れてしまったのかもしれない…

ああ〜考えたら、まじやっべえ、なんか超怖いわ…
見てみるよ、めっちゃ鳥肌立ってるし。

っーか、こんな事やっている場合じゃないな。

まだ、全員の治療は終わっていないんだ。

早く治療に戻ろう。

で、全員を治療したわけだが、にへらっと笑ったまま動かない人とか、体が動くようになった瞬間に死のうとした人とか、なんで死なせてくれなかった！と喚きたてている人とか、泣きながら助けられたことに感謝の意を示してくる人とか、毅然と私は村に帰れるんですか？と質問してくる人とか本当に色々だった。

そして、俺はそんな光景をみながら、あのエンデュアルの街から命からがら逃げ出した時の人達の反応を思いだしていた。

うん、やはり一人として同じ人間はいないんだなと実感する。

だが、ここで一番重要なのは精神的な治療だろう、と思い当たりスキル…解呪を使うことにする。

幸いにも、INT重視の配下のほとんどがそのスキルを持っていたので、物量作戦で治療していった。

だが、ここでいう解呪とは、その要因となる事実からの解放を意味する。

そして、俺は塔の中で解呪を経験したからこそわかるのだ。
解呪とはその事実が無理矢理意識を集中させ、乗り越えさせるスキルだというのが。

そして、例え事実を乗り越え受け入れたとしてもその事実が大きすぎて、一つの結論に達する人間は必ずいる。

そう、即ち“死”である。

だが、俺はそれに待ったをかける。

「俺は…人の記憶を消すスキルを持っている。

選べ。

全てを忘れて日常に戻るか、全てを捨てて逝くのかを…」

酷な選択だろう。

だが、俺はあの時死んだ人間にこれを聞かなかった事を後悔していた。

だからこそ、今度は毅然と言い放ったつもりだった。

だが、どうやら俺は泣いていたらしい。

なぜ、それがわかったかというチートだ。

お前の放つ魅力は常人には強すぎる。だから、お前が緊急事態だと

判断するまで球から出てくるな。と命令していたんだが、どうやら今が緊急事態だと判断したらしい。

そして、俺を抱きしめて頬を伝う俺の涙を拭い去ったのだ。

まったく…

せつかく、かつこよく決めたと思っていたのに、泣いてた奴も、死のうとしてた奴も、ただ成り行きを見守っていた奴も、全員がお前に見惚れている。

はあ、これじゃあ全員の記憶を消すしかないじゃないか…

そして、その日その場に在る全ての人の、その人を苦しめる記憶とチートの記憶を俺は俺の意志で奪った。

だから、これは俺の我が儘で俺が背負うべき責任なのだろう。

ならば、背負って生きて行こう。

これからも…ずっと…

— f i n —

冗談だ：

いや、終わってもいいんじゃない？

どーせ、超展開だし：

とか思ったが、これも冗談だ。

確かに記憶は消したが、その後は戸惑う人達に神器で海賊に捕われていた時の記憶を消し治療をした――スキル・忘却を持っていると教えるより、神器の方がマシだと判断したため、でまかせを言った。本当は教えたくないのだが説明責任があると判断した結果である――こと、これから、あなた達の話聞き色々支援をすること、それに配下達に関する嘘話などを教えて、一週間かけて海賊に捕われていた人達をもと居た村や街に帰した。

そして、中には故郷が無くなっている人もおり、本当に迷ったのだが、望むのならこの島に住むといいと言った所、五十人規模で住むことになった。

いや、多すぎるだろとか、そんなに人を住まわせて俺に対する反乱とか起きないの？とか思われるだろうが、鬼民族が俺に従う理由やゴークンは島の守り神である。なんてことまでも嘘話には含まれているので大丈夫だ。

まあ、人が多すぎるという意見には全面的に同意する。

で、残った人は鬼民族の嘘話や姿形に言葉さえも違うのに優しく接してくれたことに感動して住むことを決定した人や、マヤト人らしく恩を返さねば一生の恥といった理由で残った人など様々だ。

まあ、この中には建築、造船、鍛冶、農業など様々な技術者や技能を持つ者も多くおり、この“鬼ヶ島”が大きく発展する一つの要因となるのだが、それはまたの機会に…

で、今俺はというと猛烈に悩んでいた。

いや、この一週間で暇な部隊に開墾させた土地でどの作物を作るかをだ。

米と芋、この二つは決まっている。

なぜかという保存しやすく、マヤト側に大量に安価で輸出する予定の品だからだ。

まあ、米は自分が食べたいという理由もあるのだが…

うーん、豊かな食文化を築くためにはなにが必要か…

うん、香辛料は必須だろう。

後、砂糖も必須だな。サトウキビだ。

それに、やはりご飯だけじゃ物足りない、やっぱパンだろ。

つーことで小麦。

で、酒だ酒！水がないなら酒を飲め！とか、俺の血は真っ赤なワインでできている。とかこの島ではこれから言い伝えられるかもしれないから…

葡萄に大麦も決定。

他には…日本人の台所三種の神器、味噌、醤油、味醂は必須だな…

うん、大豆っ！お前に決めたっ。

それと、味醂関係ないじゃんとかいうやつは大豆に崇められろっ。

あつ、それに卵に牛乳も欲しいな…うん…絶対にいつか酪農と畜産にも手を出そう。

よしっ、作る作物はこんな感じでいいな。

いや、それにしても今からワクワクするなあ…
なんて言っただけで植えた側から豊作決定だもんな。

しかも、劣化しないまま永久に保存できて保存場所をとらない神器もあるんだ。

ウヒョー！笑いが止まらねー

まじで、チート乙。

いやいや、お前じゃねえし…

いや、だからお前じゃねえんだって、しまいにや襲うぞゴラァ！

ご無沙汰だからいいですよって、おまつ、ちよっ……――

うん、そんなこんなで、早急に植えるべき作物は決めたが真面目な話、今後の開拓計画や治水計画に輸出品の値段設定など考えなければならぬ事は山ほどある。

めっちゃ多忙である。

だが、嫌な忙しさではない。

俺は正真正銘の無眠無休の男だ。

このくらいの忙しさ屁でもない。

よっしゃ、ゴーくん付き合え！飛ぶぞ！！

目的地は、あの青春の夕日だあー！！！！

十三話（前書き）

今回は色々と稚拙な伏線を回収し張らせて見ました。
いつか芽がでることを祈ります。

十三話

「あれがヤユダの街か…
それじゃあ、ゴーくん。

あの森の辺りに下りてくれ。」

青春の夕日に向かって飛びつつ、近くのヤユダの街を目指していたんだが、街についた時にはすでに日が落ち、辺りは夜の帳に包まれていた。

で、明日の朝一で市場調査を開始するため、適当な宿をとり、この街の探索をすることにした。

そしたら、大通りっぽい所に出たんだが夜だというのに、いや…これは夜だからこそ活気があるのか。

光源がちやちなランプしかないのに、あちこちで客引きなどをする女の人を見かけたのだ。

うん、かくいう俺も声をかけられたが、チートを毎日見ている俺に色仕掛けなど通用せんわっ。

ふふん、全国の婦女子諸君よ！悔しかったら地球を三周廻ってわんっ！！と言えっ！！！！

さすれば、もしやチートの域に近づけるかも知れんぞ…

ただし、適齢期を越えないように気をつけなはれやっ！！

うん…そんなこんなで市場が開かれる場所なども分かったし、客引きのおねーちゃんに聞いた酒場のような所に行くことにした。

そこで、色々面白い話が聞けた。

なんでも、マヤト方面の島に竜が現れ、その竜がえらく凶暴で人を襲って財宝を貯めているとか、いやいや俺は竜は鬼を退治しに現れたと聞いたぞとか、本当の事実を知っていた俺にとっては、なんやねんっ！と噴出ものの話ばかりだった。

まったく…ツツコミを入れるのを我慢するのが大変だった。

今だに、俺の黄金の右手が疼きやがるぜ。

ただ、女の鬼は家のかーちゃんより恐ろしいのだろうか。と言っていたおっさんよ…

君にサキュバス・ゴブリンを見せてみたいな。

きつとあまりの美女っぷりに驚きすぎて、アピヤー！とか言いながら海に飛び込むだろうから。

うん、融和政策の一つに召喚したサキュバス・ゴブリンの娼館というのもいいかもな…

実際、サキュバスの名を冠するだけあってそういう行為は大好きらしいので、なんつーか罪悪感はあるが娼館をやるとしても俺の精神的な負担は少ない。

それでも、そんなのお前らしくない。と言う奴も居るんだろうが、塔内部で醜悪なゴブリンとそういう行為をしていた時の彼女らの喜び満たされる様を知らないから言える事だと思う。

あれを見たらサキュバス・ゴブリンの幸せはそっち方面に集約されているのがわかるから。

なんか…男の俺が少し羨ましいなと思ったほどだからな…

それに、その…淫鬼とのアレを経験できん全国の男性諸氏には同情を禁じえないっ。

俺は君達の幸せを祈ってるよ…○ーメン

まあ、そんなこんなで話を聞いていたんだが、一つ…どうしても聞
きずてならない話があった。

なんと！トルケ側が占領したという王都エンデュアルで塔に入れた
人間が現れたらしい。

しかも、大量に…

まあ、あの塔から簡単に帰還できるとは思わんから、なんというか
本当だったら大量に死人が出るんだろうなあ。

はあ、んなこと考えずに、飲んだほうがいいな…

うーん、でもまじで意味がわからんな…

なんで、今になって大量に塔へと入れる人間が現れたんだ？

俺が帰還できたから？

それともトルケの陰謀かなにか？

うん…明日の市場調査が終わったら一度、王都に行って調べてみる
か。

っじゃ、予定変更の知らせを念話で配下に連絡してっと、よしっ、
今日は吐くまで飲むぞー！

うん…基本能力が高すぎて吐くどころか酔いさえもできなかった。

俺はっ！強くなろうともこんなことは望んではいなかった…

世界なんか滅んでしまえっ、バカヤロー！

なんだよお…

チートお…

俺はっ！人生の楽しみの一つを…たった今っ！失った所なんだよっ…
ほっといってくれっ！

ぎゅっ…

ごによごによ

何っ！

無ければ作ればいい、俺ならそれができる！だとっ！

ふっふはははははは！

そうかつ！その手があったか！

チート！よくやった！

俺はっ！お前が大好きだー！！

その夜、あるユダの街の港でそんな声が響き、顔を真っ赤にしながらもどこか嬉しそうなチートがいたそうないなかったそうなの…

ふう…

なんか昨日の夜はすっげえこっ恥ずかしい事をやった気がするが、いつもより燃え上がったからいいか…

チートもなんかうつとりしてるようだしな…

で、市場調査をしたわけだが…

普通の米5？が大体40ルド、平常時は大体20ルドくらいらしい。
で、普通の芋10？が大体30ルド、平常時は大体20ルドくらいだ。

今の所、どちらも20〜25ルドの間で卸せばいいのか？

それにしても…小麦がやばいな。なんかエンデュアルは小麦を多く生産していたらしいんだがその農地が各地で荒らされ来年からの生産は不能＋トルケとマルゲンの需要の重なり＋エンデュアル難民のための食糧需要が重なり、現時点で平常時の三倍越えになっている。しかも食糧品はやはり軒並み値をあげているみたいだ。

俺ならどうにかできるかもしれないがな…

まあ、おいおいそこらへんは考えるか。

そんで、日本人的な感覚では1ルドが100円程度だろう。

で、ルドは銀でできた硬貨であり全国で使われているらしい。

はつきりいって、出来過ぎじゃね？と思うが大陸が統一された時代が長かったので通貨という概念がこんなにも発達し広がったらしいそうなの。

まあ、市場調査はこんな感じで他の街でも色々と調べながら価格を決めよう。

でだ…今からゴーくんに乗って王都エンデュアルに行こうと思う。
道的にはナウド川を上流に上って行けばすぐに塔が見えるだろう。
おっ、見えた。

つか、まだすつげえ距離があるのに、見えるとかやっぱでつかいな…

でっ、早く着きたいのでゴーくんに少し本気を出してもらったんだが、ゴーくん凄すぎる…

1時間もしない内に着いた。

でも、俺でもめっちゃ寒いし、なんというか普通にダメージを喰らった。

こりゃ、絶対に緊急用だな。

で、トルケ兵士に幻影で紛して入ってみたんだが…王都は略奪と戦乱が起こった事を表すように荒れ果て、物々しい様相を体していた。

うん…人はなんでこんなにも人同士で争うのかねえ。

な…んか、やけに焼け跡が物悲しいわ…

っと、今一番重要なのは塔だわな…

うん、眼で見たんだが帰還前に見た時と全く同じだった。

ただ、俺でも見れない秘匿された部分が多くあるので全く同じか？と言われるとわからないと言うのが正直な所だ。

ただ、前より禍が禍がしく見える気がするが、これはあの話が本当であるならば、人がこの中で大量に死ぬだろうと分かっているために俺の精神がそう見させているのかも知れんな…

うん、もう少し詳しく調べるか…

で、駐留しているトルケ兵士などにも話は聞いたんだが、聞いた人の中には魔法陣がある部屋の前まで行って、怖くなって帰ってきた奴などもいたので、たぶんあの話は本当なんだろうな…

入ってみるか…

で、警備の人間——トルケ王国としては、まだ戦乱中なのに兵士達
が大量に塔に消えたのでこれ以上、貴重な戦力を減らさないための
処置である。——を幻影でだまくらかして入り口付近から眼を使い
ながら探索してみることにした。

すると、入り口の天井に原因と思わしき物を見つけることができた。

『双頭の罘玉』☆4

(進めよ 進め 深淵へ)

【自らの設定した罘を仕掛ける事ができる。ただし、効果は永続的
ではなく、いくつかの制約がある】

これは二つで一つの☆品らしく、俺の配下がああ王都の崩壊の日に
拝借した☆品の中にこれと同じ物が一つあった。

でだ、制約を説明すると、

最大効果持続時間は一年。これより効果を持続させたい場合は効果が
切れる前に二つの玉を近づけ使わなければならない。

効果が切れると同時に罘は初期化される。

使い終わったらもう一度使うのに時間がかかる。これは使った時間
に依存する。

などだ。

で、この事から考えるとキーはアルタイや聖誕祭だと思われるので
調べてみたんだがビンゴだ。

アルタイヤ聖誕祭は各国の要人を集め毎年欠かさず行われていたらしい。

その中に儀礼的な儀式があり俺が今持っている玉を塔の前で掲げて

「我らが父であり母であるアルタイヤよ。

その御心のままに今年もこの玉を捧げよう。

我らにお守りを…」

と言うらしい。

きっとこれが玉を使うための鍵になっているのだろう。

んでだ、一週間程前にもこのアルタイヤ聖誕祭はトルケ王国の手で偽の玉を使い行われたらしいんだが、塔に入れるようになったのはその次の日らしい。

まあ、本当なら今年の聖誕祭の担当はマヤト皇国だったらしいんだがな。

だが、準備のために送った王子一行がキエンベに潰され、成り代わられあの事件が起こったために結局はできなかったがな。

まあ、仕掛けたのは十中八九、アルタイヤだろうな…きつと、アルタイヤは自分と同じ力を持つ者の登場を恐れたのだろう。

だから、これを使った。

確か鬼民族の嘘話を作る仮定で調べた伝承によると、アルタイヤは自らの誕生日にこの玉を持って塔に祈りを捧げていたらしい。

で、アルタイヤ死後にそれを曲解した人達の手で今日までそれが続けられたって所だろう。

たぶん、俺の場合は異世界人だから罠に弾かれなかったんだろうな…

それにしても、まさかアルタイヤもここまで罫が続くとは思ってなかっただろうな。

でも、塔が今まで封印されててよかったよな…無駄な犠牲者がなくて済んだしな。

ん？もしかしたらそれを狙ってやったって可能性もあるな…

そうだとしたら、すげえなアルタイヤ。

やべー、まじでこれが真実だったら、俺が女になったとしても絶対に惚れてるよ。

今まで種馬とか思ってたでめんよ…アルタイヤ

まっ、結局はわからんがきつところへんが真実に近いんだろうな。

いやー、なんか歴史ミステリー見たいでめっちゃ楽しかったわ。

あっ…

でも、やっぱり塔は封印した方がいいよな。

どうしようか…そんな塔に入れないようにするアイテムやスキルなんか持ってないしな…

うん、また探索部隊を編成してそういうアイテムを取得するまで探索させるか…

ちょっとぐらいなら、塔を人間に探索されても大丈夫だろう。

そうと決まれば善は急げだ。

ゴーくん！急いで島に帰るぞ！

あっ…

ゴーくん、やっぱ今の無し。

ゆっくり悠々と帰ろう。

もう、寒いのはごめんなんだ…

十四話（前書き）

これも超展開なのか？

それにしても最近、批判的な意見が少なくて怖い：

大丈夫だよな？

十四話

「これより、第一回鬼民族円卓会議を始める！」

「「はっ！」」

「うむ、よろしい。」

では、第一の議題だが塔型迷宮エンデュアルへの臨時派兵の件についてである。

だれか！我こそはと思う者はおらぬか！？」

バタバタバタ：

ドンガラガラガッシャーン！！

「はあ：はあ：

わ、私っ！私行きたいですっ！

王様っ！私をつ選んでください！」

「そこな鬼禱師よっ！よさぬかっ！

ここは神聖なる王の御前であり、隊長各しか参加を許されぬ会議中ぞっ！

それにっ！警備の者は何をやっているのだ！」

「あゝオジキ、すまねえな。

なんか、あんまりにも必死なもんだったんでな、つい通しちまったよ。」

「このっ馬鹿者があー！
だいたいいつもお前は——」

ザッ！

「王…そして総隊長よ！

その娘は私の部下でございます。

故に、私がこの件の全ての責任をとります。

ただ、どうか…どうか…かの者の言を聞いてやって欲しいのです！
お願いできませぬかっ！」

「た、隊長…」

スッ…

「おっとリーよ、隊長一人に責任をとらせてもいいのかよ？」

「無論…」

「「駄目だ（よな）」」

タッタッタ…

「ふうっ、みなさん私を置いていくなんて酷いですわ…」

「みんなっ！…」

「お前達…」

「「王様！どうか彼女の言を聞いては貰えませんか？」」

えっ！？

何？なんなのこれ？

はっ！もしやっ！

これは配下達の青春的一幕なのでは？

そうだった確かにこれは俺が遠い昔に望んだ青春の輝きではないかつ！

よしっ。

「ううむ…よからうっ！

そこの鬼教師よ…

理由を申してみるがいい…」

「わ、私はっごうくん…いいえっ！ゴメスと番いになりたいのです！だからっ塔に今一度入り、私もゴメスと同じ種になりたいのです！どうかっ！私に機会をお与え下さい！」

なんだとっ！

「ふっふははははははは！

ゴーと番いかっ！

それはまた、大胆なっ！

チート！お前はと思う？」

「ふふっ…とても喜ばしい事かと思えますよ…トール様」

「そうかつ！お前もそう思っかつ！

よかろう…貴様らつ名をなんという!?」

「私はっ鬼禱師…アリスっ！」

「鬼術師ミィアでございますわ。王様。」

「鍛治鬼…リー…」

「同じくっ！」

鍛治鬼…カール！」

「隊長を務める禍鬼…タウラスでございます。」

「そして…」

鬼竜…ゴメス！

以上が先遣探索部隊、第六小隊の全てでありますっ」×5

おお…素晴らしい宣誓だ。

だが…

「ふむ…ゴーは私の下に必要なだ。

よしっその警備兵…名はなんという?」

「へっ?巨鬼のガイガスでございますが?」

「では、ゴーの変わりにそこのガイガスを入れ先遣探索部隊、第六小隊とするっ。

そして再度問おう。

この第六小隊以外で我こそはと思う者はおらんかっ!？」

バツ!

「我らが隊もっ!」

「王に絶対なる忠誠をっ!」

「王様万歳ー! 鬼民族万歳ー!」

おおー…全ての部隊長が手を挙げやがった。

「うむ…貴様らの忠誠、実に天晴れである。

だが…多すぎるな、総隊長! 選別をしろっ!」

で、第六小隊を含む二十部隊の派兵が決定したわけだ…

そして、今はというと王都エンデュアルにほど近い森に潜伏している。

「我が配下の鬼共よっ!

貴様らはこれより王都エンデュアルに潜入し塔の探索を開始するっ!

よいかっ!

目的は塔を封印しうるアイテムの入手に、そこの鬼祈師アリスの進

化であるっ！

そしてっ！

皇王人：トールが命じるっ！

生きよっ！貴様ら全て生きて帰ってくるのだっ！

では、行くがいいっ！我が鬼共よっ！」

その王命を胸に、そこに集められた全ての鬼達が行動を開始した。
ただ、彼らが王命を遵守できるかは正に神のみぞ知るところである。
う。

そして、そんな物語の裏でこんな会話がなされたそう、なされな
かったそう：

「ごくん：私が塔から帰ったら“私”を貰ってくださいっ！」

「がう？」

なあ：あーちゃん：

わたしって美味しいのか？」

「もうっ：

ごくんは、いつまで経ってもおばかさんなんだから：

そうだね…

きつと…世界で一番美味しいはずだよ…」

「そっかあ…

じゃあ貰うよ！

楽しみだなあ」

「うううごくんのっぱかっ！」

「どうしたの？あーちゃん？」

この会話を盗み聞きした面々が

「ええ…下半身的な意味で喰っちゃまうわけですね。

ごくくんったら馬鹿な癖になんて恐ろしい子っ！！」

とか

「あれは馬鹿とか天然とかいう次元じゃねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。」
とか言ったそうな言わなかったそうなの。

正に、これも神のみぞ知るところであろう。

ただ、どのような結果になろうとも恋する乙女は強く優しく美しいのだ。

全国の恋する乙女と漢女達に、幸多からんことを皆も一緒に祈ろうではないか：〇ーメン

ところで、勢いであーちゃんの進化までもを目的にしたが、今の配下達の状態であーちゃんの進化はちと厳しいような気がする：

いやっ：配下を信じないでなにが王だ！漢だ！！日本人だ！！！！

俺はっ！あいつらの友情パワーを信じるっ！

しかし、一段落着いたらまた迷宮に潜るかな、と覚悟を決めた瞬間でもあった。

ふうっ塔への対策としては一応の所これでいいか。

それにしても、島での作業が大幅に遅れるなあ：

はあ：何事もが万事上手くいくわけではないということだろう。

まあ、米と芋の量産体制はもうできているし、ゆっくりとやればいいだろう。

だが、いくつか問題も発生している。

まず、島に來た略奪者への対処だ。なんか例の変な噂を聞いてやって來たらしい。

すぐに取り押さえられたし弱いから問題にはならないが、別にマヤトの領地で犯罪を犯したわけじゃないので、マヤト側に引き渡すわけにはいかんし、殺すのも奴隷にするのも今はちよっとな：

という事で、鬼ヶ島に関する記憶を消して適当な遠くの島に流した。

彼らほど行動力があるならば見事な開拓民となるだろう：

鬼畜？ いやいや命をとらんかったただで優しい方だよ：

今の時代は人権？ なにそれおいしいの？ というごくくん状態だしな。それに、後から聞いた話なんだがあの海賊達も処刑されたらしい：

まあ、犯罪者を養って余裕なんか今のマヤトにはないわな。

それにこれが彼らの犯した罪のへの報いなんだろう。

未熟な人が愚かな人を裁く、これは矛盾した行為ではあると思うが完璧で完全な人間がない以上、誰かがしないといかん行為でもあるのだろう。

ただ、これは俺の取った行動で起きた結果でもある。

きちんと言つめ合わないと言けないだろう。

真に自らを裁けるのは己しかないのだから：

あれ、かつこよくね？

まあ、受け入れ見つめた結果は鬼畜上等！ どんときやがれ！ だったかな：

それにだ、今でもなんか少しつつ鬼が産まれているので、鬼を畜産しているようなもんだからあながち間違いでもない。

鬼畜王トール：

なんかそこまで悪くない気がする：

で、二つ目の問題だが、鬼に惚れる人が出た。

いやなあ：ロード系の鬼達は人により近いし言葉もすぐに覚えたんだ。

それで、意思疎通ができてきていつの間にか見たいな感じらしい。

確かにロードといえど鬼は鬼、常人より遙に肉体的にも優秀だからな：そこらへんはまだわかる。

だが後々、禍鬼とか巨鬼とかの受け入れがたい容姿の鬼に走る人も出て来ること、女性の精神性を俺は一生を賭けても理解できないだろう。と思わされるのだった。

きつと、これは喜ばしいことなのだろうな：

で、三つ目だが、移住希望者がきた。

まあ、帰った方がいいが村に馴染めずに、と言った人や村に帰した人に聞いて興味を持ちと言った人が多かった。

だが、中にはマヤト側やユダ側のスパイもいたんだわ。で、悩んだがそいつらも受け入れる事にした。

これには、鬼が本当に人に対して友好的だと見せるため、マヤトとユダの鬼ヶ島への警戒心を和らげるため、鬼ヶ島との交流は確実に利益となることを見せるためなど色々理由がある。

もちろん不都合な真実、チートの事や俺自身のスキルや異常な能力の高さなどを知った場合は記憶を消させて貰うがな：

で、四つ目は人同士の些細ないざこざが起きたことだ。

うん、鬼にはさ：なるべく仲良くするように！とか困った時は助け合うように！とか簡単だけれど大事な命令をしているから非常にみんながみんな良好な関係が築けているんだ。

だから鬼にはほとんど問題はない。

だが、やはり人は違うのだ。

確かに簡単だが簡単だからこそ難しいのだ。実際、鬼にした命令の内、俺自身が護れているものなど一握りしかない。

しかし、傲慢だが簡単な法律を作った。

なるべく公平公正に。
なるべく嘘をつくな。
困った時は助け合え。
悪事はするな。

そんな簡単な法律だ。しかし、あまりにもこれを守れない場合は本当に傲慢だが鬼ヶ島から強制的に出ていってもらおう。
幸いにも、まだこの世界には未開拓の土地などたくさんある。
場所には困らない。

まあ、そんな事にする可能性は低いだろう。
何故なら鬼が模範となっているからだ。

だからこそ人も今のところは協力しあえている。
これなら大丈夫だろう。

んで、五つ目だが個人的にはこれが一番重要だ。

確かに、作物に成長促進の効果があるアイテムと回復薬のコンボは素晴らしい。

ほとんどの物が豊作となる。

だが、気候的に合わない作物は回復薬を使う回数がどうしても多くなり、味も落ちるし管理がめんどうになる。

だからこそ、アイテムへの効果付与のスキルの挑戦を開始した。

ただ、まだ全然だ。

カカシに一定空間の温度を一定に保たせるとかの効果を付与しようとしたら、朝6〜8時の間なぜか透明になるようになった。

カカシの意味ねえ〜

漁師がいたので、その人のために網に魚が好む匂いを付与させようとしたら、なんかお好み焼きの匂いを発するようになった。

ただ、いつもより大漁だったと喜んでいた。

結果オーライ？

まあ、入植二週間で起きたのはこんなところだ。

で、これからはマヤトやユダとも交易が始まるだろう。

その前にしておきたい事がある。

そのため、今から島の人間を重大発表があると言って集めた。

そう、新しく召喚したサキュバス・ゴブリン達と娼館「鬼女の館」のお披露目である。

そして、今まで彼女達を紹介しなかったのは、彼女達の外見と種族的な特性によって遠い昔によく人間にさらわれて酷い目にあってきたからなんだ。

ただ、私達はあなた達と接し人間を信用してみようと思ったんだ！だから、ここに娼館「鬼女の館」の運営を宣言する！
的な事を詳しく語ってあげたら、なんとか信じてもらえた。

あ、島の男性人は諸手をあげてアピャー！とか言いながら海に飛び込んでいたよ。

もちろん、俺も飛び込んださ！

ただ、女性陣はそれを冷ややかな目で見ていたけどな！

後悔はないっ！

アピヤー！

皆も一緒に！？

十五話（前書き）

風邪をぶりかえし三日ほどダウンした後に、何故か小説を書くモチベーションが一気に下がってしまいました。

更新遅れて申し訳ありません。

十五話

「こちらが島の交易を取締る鬼のエチゴヤです。

エチゴヤ…挨拶を。」

「ご紹介に預かりましたエチゴヤでございます。
マヤト王、それに宰相閣下、以後よろしくお願い致します。」

「う、うむ…」

「それでは早速商談に入らせて貰いたいのですが、よろしいでしょうか？」

「あ、ああ…」

パチンッ

ガラガラガラ

「では…まずこちらの品々をみて貰えますか？
これらが今のところ島で扱っている交易品です。」

エチゴヤっ！

俺っ聞いてねーし：

っーか何だこの演出！？
かっこよすぎる！

「ほう：これはなんだ？
真っ赤だが食べられるのか？」

「ええ：後ほど、それで作った料理なども紹介しましょう。
ですが今見てほしいのはこそこの米と芋の品質です。
見てもらえますか？」

「ふゝむ：普通だな。」

「ええ、そうですね。」

こちらとしては、その品質の米と芋を米5Kgを25ルド、芋10Kgを25ルドの価格で各1000Kgずつをマヤト側に手始めに卸したいと考えております。

どうでしょうか？」

「ほう：25ルドか：確かに安いな。」

価格はそれで良い。

ただ、卸す量は増やせるのか？」

「ええ、もちろんですよ。

具体的にはどの程度増やしましょうか？」

「できれば、米を10000Kgに芋を5000Kgほど欲しい…
できるか？」

「米は一週間ほど時間はかかりますが用意はできます…後、輸送は
どのようにするつもりでしょうか？」

「用意できるのかっ！
よしっ…ならば買おう。」

輸送の方は島に帆船を何台か派遣するのでそれに載せればよい。」

「わかりました。
では他の交易品ですが——」

——

「ふう…まさか、あのような量の食料を一ヶ月もしない内に用意す
るとはな…」

「ええ…本当に帰還者なのかもしれないですね…」

「それはわからないが…マヤトに有用なのは確かのようなな。」

「ですが…危険では？あのような者達を従えてるのですよ？」

「だからこそ、あの島を監視しているのだろう。」

それに父上が言ったように私の決断でこの事態を招いたのだ。

この事態に収集をつけるためには、たとえ鬼の手であろうとも借りなければならぬだろう。」

「それは…」

「それに宰相…あれを信じたのはあの父上だ。」

私がまた失策をしない限りは大丈夫だろう。」

「なにか…変わりましたね。」

「ああ…父上の何年ぶりかの説教は効いたよ。」

私は焦っていたのだろうか。

王に成って周りを認めさせる事に執心しすぎて、マヤトの何たるかを忘れていたようだ。

ただ気付くのが遅すぎたが…」

「それは…私もそうでしょう。」

欲に駆られ、あの時キエンベの支配を支持したのですから。」

「はあ…どちらもまだまだな。」

「そう…ですね。」

ですが、これで今後半年程度は兵士の兵糧に難民の食料の心配が確

実に無くなりましたし、エンデュアル側での偽マヤト兵士の暗躍も収束に向かっているとの話です。
上手くやれば早期に決着をつけられるかもしれません。」

「そうだな、上手くやればな…

宰相：苦勞をかけるが頼むぞ。」

「元よりそのつもりですよ。

私とてマヤト人なのですから…」

今から七百年ほど前にケルタⅡマヤトと言うハイヒューマンが産まれた。

奇しくも彼が産まれた当時のエンデュアル大陸は内乱により相当に複雑な情勢にあった。

そのため彼ら親子は命を狙われたため辺境の地に身を隠した。

だが、彼らはハイヒューマンだったために日々の暮らしには困らなかった。

それはそうである。何故ならハイヒューマンとは常人の枠には納まらない。

素手で凶暴な熊をあつさりと倒し、例え氷点下を下回る外気に晒されようと涼しいで済んでしまう。

ただハイヒューマンとして産まれただけでなにもいらぬ。野人のような生活でさえ彼らは快適に暮らせるのだから。

そんな例にもれずに彼ら親子も辺境の地で外界との交流を断ちながらも悠々と暮らしていた。

だが、すでに青年となっていたケルタはその生活に飽き飽きしていたため両親を必死に説得した。そして、彼はとうとう巢立ちの時を迎えることになった。

その後、様々な冒険の果てに彼は初めて海を見た。

そこは自分自身がとてもちっぽけに思えるほどにただただ広く美しく彼の好奇心を掻き立てた。彼は本能の赴くまま着の身着のままに泳ぎ続け、ある未開の島に辿り着く。

その島のヒューマン達に彼は今までのヒューマンとは弱い存在である。という価値観を粉みじんに破壊された。

そう、島の人々は独自の技術を発展させ時には自然を味方につけ日々を強く生きていたのだ。

そんな彼らと興味本意で生活をしていたケルタは次第に彼らに尊敬の念を抱くようになった。

そして島の人々もそんな尊敬の念をもって接してくる超人的な力を持つ青年に好意を持つようになり、いつしか青年はその島の王となった。

それがハイヒューマンとヒューマンが互いに協力しあい築いてきた稀有なる国“マヤト皇国”の始まりである。

そんなマヤト皇国で代々マヤトの王が若い頃に必ずかかってきた病がある。

それは偉大なる先祖に対する重圧か…

それとも自身の能力に対する慢心か…

はたまた王としての責務により嫌が応にも見せつけられる現実か…
ただただ深く暗い孤独を抱え自信を、いや…自身を見失わせる病。

名を“愚王病”といい、これを治すのに特効薬ではなく、ただただ王としての時間と経験が必要なそうなの…

はたして第八代マヤト皇国国王サスノオⅡマヤトはこの病を克服できたのだろうか？

いや…それはこの後の彼の行動により判断がなされるのだろう。

ただ一つだけ言える事がある。マヤトの民は情に篤く我慢強い。そして今までマヤトを導いてきた王家に対して恩と愛着と誇りを持っている。

故に王家がどのような愚行を曝そうとも信じて待つのだろう。

ただただ待つのだろう。

――――

ふう

なんかマヤト王達との最終的な交渉のほとんどをエチゴヤがしてしまった。

うん…まじで俺じゃない子状態だったわ。

なんか寂しい…

と同時に配下の成長が誇らしかった。

エチゴヤの奴、商談が終わった後にサムズアップしてきやがったかな……

お前はどこのナイスガイだっ！

そーいや取引を取締る鬼っていうのは第二回鬼民族定例会議で島の各種産業や警備などの色々な責任者を決めたんだが、その会議で経済の責任者にエチゴヤが選ばれたため、あそこでは取引を取締る鬼と言ったわけだ。

で、責任者にした鬼達なんだが本当にどういつもこいつも、あれ？俺必要か？と思わせるぐらい有能だよ。

特に各技術者を束ねることになった鬼達はすごい。

その鬼達のほとんどが島に残った技術者に弟子入りした鬼達なんだが一週間ほどで師匠を完全に越え新しい技術の構築をしていた。

かくいう鬼女の館の本館も建築担当の鬼達が習得した技術とスキルにアイテムの効果を合わせて建てた館だ。

その外観は和風ながらまさに豪華絢爛とっていいほど夜になると各所に設置した灯籠が石作りの道に丁寧に入入れされた庭や木造りの館に彫られた模様を映えさせて幻想的な雰囲気を出しさらに鬼女達の魅力を存分に引き出すってなもんだ。

うん、今の所は島で一番の建物だろう。

これを他の建物を築きながらたった一ヶ月ちょっとで作ったとか意味わからんよ……

いや……確かに配下の鬼達のDEXにINTは異常なほど高いし、切り出した大量の資材に塔から持ってきたアイテムなど達成できた要因は色々あるが色々な作業を平行しながらやってこれだ……いかに

鬼達の能力が高いかわかるだろう。

人間の技術者の皆様が、俺の技術を研鑽したあの日々はなんだったんだ？とうなだれる姿はまさに納得のいくものであった。

まあ、まだ立ち直れない人はいるが色々な葛藤や人間ドラマを経て、気持ちに折り合いを付け前に進んでいる人もいるので本当に感動ものだ…

俺はあなた方の勇姿を忘れない！

だから鬼女の館を無料でその人達に一時的に解放したのは許されるべき行為だろう。

そう…漢にはやらねばならない時があるのだから…

しかしだ…なんか本当に俺のすることが一氣に少なくなってしまった…

きっとこれは俺をチートとの熱々桃源郷…僕と彼女の背徳的で退廃的な関係々に誘うための罠に違いない！

だが、俺はそのような甘く魅力的な罠などには屈し…ないっ！

ということであーちゃん達の支援のために塔にまた潜ることにした。

まあ、塔に潜る本当の理由としては、

マヤト王との約束を果たせた。

鬼ヶ島の変な噂も下火になり、近くの人間の島や交易に来る人々の間では鬼に友好的な人が多く見られるようになった。

配下の鬼達に島を任せても大丈夫だろうとの核心が得れた。

やはり俺の召喚した鬼属の大量虐殺がなければ、あーちゃんの進化は厳しい――塔を封印しうるアイテムについてはアルタイヤの子孫がハイヒューマンだということやアイテムによる幸運補正により、そこまで高い階層に行かなくても取得できる可能性が高いと推測している。そして、進化については今の配下の力量的に相当深い階層の敵を倒さなければ進化はできなさそうなため――と睨んでいる。

など色々と思惑があるが一番の理由はやはりあーちゃんを応援したいからだろう。

なんかチート以外は消耗品だとか言ってたが島で暮らすうちにやっぱり今いる配下達には幸せになってほしいと思うようになってしまったのだ。

はあ…自分の優柔不断さと傲慢さに嫌気がさす。

まあ、そんな自己嫌悪をしながらゴーくんに乗ってゆつくりと王都エンデュアルに来たわけだが、なんか帰還者が出たという話で持ち切りだった。

で、またもやトルケ兵士に紛して、あっちにズバツとこっちにシュッと情報を収集したわけだがなんつーかよくわからん。

なんでも帰還したのはハイヒューマンの將軍だったらしい。

その將軍が言ったという武勇伝を聞くと、塔に入ったら自分一人になり進んだら怪物が襲ってきた。

その怪物達をバッタバタと薙ぎ倒し進んでいたら帰還の巻物を入力しそれを使い帰還できた。

かなり省いているがこのような内容だった。

うん、眼で見た断片的な塔の情報と照らし合わせると塔に入った先はやはり一人一人違うみたいだ。

もしかしたら探索部隊もばらばらになったのかもしれないと危惧しささと塔に入ってすかさず念話——塔の中と地上での通信はできなかったが、塔の中と塔の中での通信は可能——を使ってみると普通に繋がって全探索部隊の無事を確認できた。

どうやらバラバラになることはなかったらしく、今は十八階層にいるようだ。

やはり配下達とモンスターや罠の質が大幅に離れているために相当速く攻略が出来ているみたいだ。

ただ、十八階層でもまだまだモンスターの質が配下達と離れすぎており、あーちゃんの進化は当分先になりそうな雰囲気だったようだし、目的のアイテムもまだ見つかっていないらしい。

うん、来てよかったかな？

で、チートを球からだして二人で一気に一階層から上ることにした。

なんか二人で久しぶりに上る塔は新鮮で懐かしくてなにかのアトラクションのようだったためいつもチートと朝までしている運動とはまた違った清々しさを与えてくれた。

けれど、戦うチートの後ろ姿がとても魅力的で見惚れてしまい簡単な罠に何度も嵌まってしまった事は内緒だ。

うん、その後俺が前に出る事でその問題が解決したように思えたんだが今度はチートが罫に何度も嵌まってしまった…

いや…なにげに顔を赤くするチートは可愛かったのだけれど一応言っておこう。

なんでやねんっ！

閑話 チートの思い（前書き）

この話は主人公が塔から出た次の話にいられたかった…

まあ、チートだけにちゅつと短いが楽しんでくれい。

閑話 チートの思い

私が最初に感じたのはなんだったか：

そう渴きと飢えと怒り、それとも嫉み？わからない：
そんなごちゃまぜな感情だったはずだ。

いや、その時の考える術を持たない私には感情などという高尚な物は備わっていないかっただろう。

ただ、まるで畜生のようにその衝動に突き動かされ、その場所に行った事は覚えている。

そして、運命か必然かそこで私は幸福を得る事になる。

「クソが！待てやゴラァァ！！」

最初はただただ、怖かった。

それに決して逆らってはならない。

そう思わせる威圧感を今まで衝動の対象だった存在が発したのだ。

そして、畜生であった私の本能が理解する。

この存在にこの下等な衝動を向けていた愚かしさを、だから怖くて逃げ出した。

だが、その声の中に宿る意思が全てを逆転させる。

そう、まるで甘い甘い愛の囁きのように頭に染み込み、今まであった衝動は歓喜に変わる。

今思えば酷い罵声だったのだろう。

だが、その罵声は畜生だった私に相応しい言葉でもあったのだ。

そして甘言が続く。

「ゴブリン共おお殺しあええ！！…」

私は横にいた同属をすぐさま右手に持っていたこん棒で殴打した。
そして力の吸収による快感とともに本能が理解する。

この甘言に従うことこそが私の幸せだと。

そして、歓喜とともに従い続けていた私は、いつの間にかチートと呼ばれていた。

それは数多にいる同胞の中で、私への嫌悪とともに向けられた蔑称だったのだろう。

今だ畜生であった私はその意味を理解することも、それがどれだけ幸福なことだったかも理解できなかった。

それから、私は念願の畜生からの進化を迎えた。

そして、この時から急速に自我が芽生え、思考をすることができるようになった。

そう、私は喜び悲しみ怒りありとあらゆる感情の素をこの時、王から授かったのだ。

私は、授けられたその全てを使い学習を開始する。

王は私達が何かを得てきた時に酷く喜び私達を褒めた。
初めに学んだのは褒められることでの歓喜であった。

王は私達に被害がでると言葉には出さないが頭の中で謝罪を繰り返した。

そして、それは意思として私達に届いていたのだ。

きっと王は今だに気づいていないのだろう、だが、その時私は王の悲哀を知った。

それからだろう、王の全てを注視し理解しようとしたのは：

すると私は気づきを得た。

言葉の違い、姿の違い、行動と意思の矛盾、本当に色々な事に気づいた。

だが、その気づきを尋ねる手段を私は持ちえなかったし必要もなかった。

しかし、幸いにも私に届く意思と言葉の比較により、日本語というものを少しだけ覚える事ができた。

その効果は劇的であった。

王が私との対話を望むようになったのだ。

その時の王から届く意思は喜びだった。

だから、私は嬉しくなって必死に王の話を理解しようとした。

そして、私と話している間中その喜びは途切れる事なく私に届き続ける。

私は他の同胞にもこの喜びを知って欲しく、暇な時を見つけては日本語を教えた。

この時、私はただただ幸福を甘受していた。

そうして、その仮定で私の知識は大幅に増え続け第二の進化を果たした。

けれど、また王はいつものようにどこかで悲哀を抱えながら同胞達を召喚した。

知識も増え、思考も感情もより高度になった私はその時になり、やっと王の悲哀の理由がわかった。

王といくら対話しても私には話してはくれなかった事である。

きつと王は私達の意味を捩曲げ利用して自分の利にする事に対して深い自責の念を持っている。

私は今までに得た知識と思考によりそう結論づけた。

もしも、私が王にそれは違う私達に意思など本来はなく、その全ては貴方に授けられた物だ。

だから貴方の好きに使っていいのだ。

そんなことを言ったとしても頑なに取合わず認めないだろう。

その時、その程度には私は王を理解していた。

だからこそ日常の中で望んだのだ。

もっと王を支えうる自身の姿を…

もっと！もっと！もっと！！！！

願いは届いた。

私は王の理想とする姿を手に入れた。

そして、王の欲望も情愛も苦悩さえも包み込み癒した。

何回も何回も癒して深い喜びに満たされた。

ただ、あの時よりも優秀な個となった私でも今だに王の全ては癒せない。

王の意思はいつもどこかでゆらゆら揺れて自身に傷を作っている…

だから…今だに癒せない。

だけど、私には確かに癒している実感がある
ずっと願いつづければいつか叶うのだろうか？

王の喜びが私の喜びで、王の怒りが私の怒りで、王の悲哀が私の悲哀で、王が望んだから今の私がある。

王は心の奥底で私達の自由と幸せを望むけれど、あなたの幸せが私の幸せだ。

私達はあなたに感謝してもしたりないのだから貴方は貴方だけの幸せを望めばいい…

それが叶うまで、いつまでも支えて慰めよう。

ずっと…

ずっと……

ずっと…………

「チート…名前を変えるか？」

「いいえ…この名前が良いです。」

「そうか…」

「はい…」

それはいつかの会話…

それはいつかの思い出…

その時何を思い何を考えたか、それは二人だけが知っている秘め事である。

—f i n—

十六話（前書き）

すいません。

更新遅くなりました。

なんか小説が最近纏まらない…

出来が心配だ…

十六話

「ガイっ！そこはミーの斜線上に入らないようにしろっ！」

「ガイっ！お前の巨体から繰り出す攻撃には間合いが大事だ。だからもう少し間合いを空けて戦ってみろっ！」

「いいぞっ！ガイ！その調子だ。だいぶ良くなってきたっ！」

「ほお…自信がないか…なんなら後でカー達にも聞いてみればいい。やり易くなったと言うはずだ。」

「ああ？戦闘がどうかって？

そりゃあ最初より格段にやり易くなってさ。

まっ…あの猪突猛進のゴアの援護してたんだ。たかが巨鬼に合わせるぐらいどうって事ないさ。

お前は自由にやればいい。

なあ…リーよ。」

「無論だ…お前はよくやっている…」

「あ…ありがとう。ごぜいやずっ！お二人どもっ！」

――

「ぐすっ…ミーちゃんよかったね…ガイガスくん頑張ってたもん。」

「そうですわね…最初はあの巨体に戸惑いましたけど、今はあの巨体が頼もしいですわ。」

「あっ…ごめんミーちゃん念話が来たみたい。」

隊長っ。本部隊から今念話が届きました。

えっと…どうやら王様が塔に入ったので王様との合流までこの階層に留まるとの事です。」

「そうか…」

王が来る前に一つくらいは目的を達成しておきたかったな…

全く不甲斐ない事だ。」

「ふふっ…隊長はいつも真面目すぎますわ。」

きつと…王様はあーちゃんのあの熱い告白にほだされてこんなに早く塔に来たんじゃなくて？

ねえ…あーちゃん？」

「ううゝミーちゃんのいじわる…」

じゅあつ！そういうミーちゃんはどなの？
昔っ！た…」

ガシッ

「ムー！ムー！」

バタバタ

「ふふ…それ以上は言わせませんわよ…あーちゃん？

大丈夫…怖くはありませんわ…ほら…私の目を見て…」

『スキル…忘却が発動しました。対象の指定された記憶を忘却します。』

「あれっ？ミーちゃん何やってるの？」

「おほほ…なんでもありませんのよっ。
さあ隊長っ！探索を再開しましょう。」

「う…うむ…」

「リーにガイよ…やはりミーには逆らわないほうが無難だな…気を
つけろよ…」

「…承知…」

「わ…わかっただよ…」

ギロツ

「何か言いましたか？カールさん？」

にっこり

「い…いや…なんでもない…」

「そう…それならいいんですのよ…うふふ…」

果たして巨鬼のガイガスはこの部隊に入ってよかったのだろうか？

鬼術士ミーア…先遣探索部隊第六小隊最大のアタッカーでありながら小隊の頭脳でもある。

彼女のスキルを使うタイミングに選択、危急時の後方からの指示は正的確でメンバーからの信も厚い。

また、少し垂れた目尻が優しげな雰囲気醸し出しておりそこが彼女のチャームポイントでもある。

面倒見も以外といいので年下の鬼女達からはミーアお姉ちゃんと呼ばれ慕われている。

そんなところがその上品な仕草と相俟って魅力的に映り彼女に惹かれる鬼男もいるとかいないとか。

もしかしたらそんな鬼術士ミーアがガイガスのいや…第六小隊成功の鍵を握っているのかもしれない。

ほっ はっ とうっ と…

四方八方から飛びかかって来るモンスターを時には避け、時には倒しと塔をチートと進んでいたんだが、途中でまたもや塔の不思議ちゃんな一面を垣間見た。

なんとっ！球に吸収したはずの森や山が再生していたのだ。

うん、前の時は森や山を全部吸収したらなんか変な事が起きるんじゃないか？とか少し勘繰ったため良さそうな土地だけを選別して吸収したんだが今回は前よりもがつつりと吸収させてもらった。

そのため一気に球の中の土地が増えたので更なる作付けや鉱石の採取が可能になるだろう。

うん…笑いが止まらない。

実際の所、今でも十分満足しているので土地などそこまで必要としていないのだけれど、やはり自分の利が増えるというのはそこはかとなく嬉しいものなのだ…

ただ、前と違って大規模に土地を吸収したため跡に残ったクレーターのの中に取り残されたモンスター達が、土の壁をがりがりとする姿には哀愁が漂いなんかかわいそうだった。

まあ諦めてくれや…

なに…また再生するまでの我慢だろう。

大丈夫！俺達に襲い掛かってくる度胸があれば生きて行けるさっ！

ではっ。土地を分け与えてくれたモンスター達に敬礼っ！

よしっ。チート！ちゃっちゃと先に進むぞっ！

でだ、十階層に着いたんだがなんか階層自体が普通の迷宮に変化していてボスの間的な物が無くなっておりミノタウロスもいなかった。あの部屋でミノタウロスを倒したらチートも特典が得られるやもしれんとか思っていたので特典が取れず残念だ：

まあ、これ以上チートにチートになられてもなんか二重の意味で羨まけしからんから別にいいか：

とにかく早く探索部隊に追いつかないといけないのでここからは念話で最短ルートや厄介な罠の解除の仕方を聞きながらハイペースで進む事にする。

まあ、初めて見るモンスターやドロップアイテムなど心惹かれる物は多々あるし、警戒していても罠に引っ掛かる時はどうしてもあるのでハイペースと言ってもそんなに早くないのかもしれない。

っ！か今の所はチートと俺の能力なら例え罠に引っ掛かっても楽に抜けだせるんだ：

ただ、なんというかたまに罠でチートが着ていた神秘的な雰囲気を持つ☆品のローブがいい感じに破れたり濡れたりしてとてもエロい状態に成ることがしばしばあった。

ローブ自体は☆品のため損傷しても勝手に修復してくれるんだが、力の吸収による快感と戦闘による高ぶりが相俟って、おいちゃんにはもう辛抱堪らんのですよ：

うん、いくら強くなってもそういう根源的な欲望には逆らえないな：

やっぱり俺もこういう所は完璧に人間準拠なんだよな：

なんかいつもこういう所には少しだけ安心するわ。

でも…唐突に思ったんだがチートって生まれてから三年も経ってないだろうから外見と精神が大人なだけの幼女なんだよな…

あゝ…ごほんっ！

全国の変態紳士の皆様方にどうか御教授願いたい…

この場合は果たして、

変態紳士協定

Yes！ロリータ NO！タッチ

に違反するものでありましょうか？

私としましては種属的な成長力の差やもう体も精神も出来上がり本人もそれを望んでいた事などを踏まえた上で裁定を下して頂ければと愚考します。

それではよしなに…

紳士NO・18863 熱いパトスより

っと…忙しいのにこんな手紙を書いて何をやっているんだ俺は？

なんかチートがめっちゃ優しげに俺を見てきてるんだが…

くっ！なんだ…この体の奥底から沸き上がる羞恥心は…

きつと…長年隠してきたエロ本とエロDVDを親に発掘され生暖かい目で見られた中学時代に匹敵もしくは凌駕するぞっ！

断言しよう…

今なら小一時間は悶えられるっ！

はあ…はあ…

それにしても本当にすごい精神攻撃だった。

強化されたM I Dがなければ今頃俺はこの塔もろとも爆発していただろう…

だが俺は生きているっ！

生きているんだっ！

友達なんだっ！

だから俺はこの羞恥心に屈さず進むよ…

さあっ。先を急ぐぞっ！

チート！ついて来いっ！

———

うん…どうにか勢いでごまかせたようだ。

なにかチートが微笑ましそうに見ているような気がするが気のせいに違いない。

おほっ。そんな風にチートの目を気にしていたら魔法陣を発見し突入をすることになった。

いざっ。十三階層へっ！

うん：魔法陣を抜けるとそこは雪原地帯だった。

なんだろうひどく此処を一望できる場所に露天風呂を作りたい。

しんしんと降る雪を見ながら露天風呂で熱燗をクイツと一杯、そこへ際どい部分を純白のバスタオルで隠した褐色美人なチートが背中を流しに来ました。と登場：

良い：すっごく良い：チラリズム最っ高！

ということで一氣にこの雪原地帯の吸収をすることにした。

やっぱ邪までも目的があるっていうのは重要だな。

森や山を吸収した時とはワクワク感が違う！

あの時は哀愁が漂って見えた、クレーターに取り残されたモンスター達も、土の壁を飛び越えてこちらに向かってきている。

うん：前とは躍動感が全然違うっ！

ってダメじゃんっ！

おおうつ。鹿っぽいモンスターの角が目の前に迫ってきたし：

まあ、簡単に避けてすれ違い様に突撃してきたモンスター達の首筋をククリっぽい愛用の短剣で切り付けてあげたけども、やっぱり☆品の武器は最高に使い勝手が良い。

今は攻撃した相手を猛毒状態にする短剣を使っているため、突撃してきたモンスター達は背後で一氣に消耗して事切れた。

他にも良い装備は色々とあるんだがこれと特定のスキルの威力が三倍ほどになる杖を主に愛用している。

ああ：勘違いしないでほしいんだが俺は眼で理想的な振り方や使い方を知り、高いDEXでそれを習得するという事をやっていたので、他の色々な武器も高次元で使いこなせている。ただ短剣と杖を長く

使っていたので愛用しているだけだ。

ん？　どうやらチートの方は大規模攻撃スキルを使ってモンスターを一網打尽にしたみたいだ。

逃げ場が無くなるほどの巨大な炎で包んで焼くとか容赦ねえよな……まあ、雪原を背景にしてモンスター達が光となって消える瞬間はなかなか幻想的だった。

が、すぐに他のモンスターが来てその余韻に浸る暇なんてなかったので残念だ……

うん、やっぱり二人じゃモンスターが多すぎてめんどくさいので今回もさっさと魔法陣を見つけて次の階層に行くことに……

そっからは特別なフィールドに出くわすこともなかったし、結構鬼属のモンスターとかが多く出るようになったので戦わずに済む事もあったため、さくさくと進めてとうとう配下達が待っている十八階層への魔法陣に着いた。

で、魔法陣を抜けたら全部隊で出迎えをしてくれた。

うん、懐かしい顔ぶればかりでどうやら欠損もないようなので嬉しい限りだ。

おっ、アリスがいる。ふっふっふっ、そんな目で見られても残念ながらゴーくんは島に戻したのだよ……

やっぱり塔という試練を乗り越えてゴーくんの元に行くアリス……そして……みたいな感動的なシーンを演出したいからな。

まあ、他にも島に残った鬼達の移動手段や有事の際の防衛力などの理由があったりするが一番は演出のためだ！　島をあげての祭をするのが今から楽しみだぜっ！

それにしても此処に着くのに一週間程度はかかった。

上層に行くほどにでかくなるから仕方ないと思うがどうにかならんのかね？

なんか転移とかそんな便利なスキルがほしいな…

それとも時間はかかりそうだがそんなアイテムを一から作るしかないか？

まあ、そこらへんはぼちぼち考えるか…

んじゃ、色々と指示をだしてちゃっちゃと目的を達成して帰りますか。

よっしゃ、気合い入れて頑張るか！

閑話 喜劇と悲劇の舞台“キエンベ” (前書き)

執筆が進まずに更新が遅れました。

申し訳ありません。

閑話 喜劇と悲劇の舞台“キエンベ”

今から…五十年ほど前だろうか？

キエンベ王国の青年が、マヤト皇国の王に祖国の助けを求めた。

そして、彼の言葉を確かめるためにキエンベの地を見て回った、第七代マヤト皇国国王“カグツチⅡマヤト”は呆然としながらこう言った。

「此処は…地獄か…」

キエンベ王国の成り立ちは今から約七百年ほど前にまで遡る。

事の始まりは始祖王アルタイヤ亡き後の大陸の動乱であった。

この動乱により、エンデュアル王国から各地の統治を任されていた有力な人物が次々と王国からの独立を宣言するに至り、大陸の各地で争いが巻き起こった。

そして、今のキエンベの地を任されていた、一人の男もこの動乱の流れに乗るかのように、王国からの独立を宣言するに至ったのである。

そう…何を隠そう、この男こそがキエンベ王国建国の祖“モーチュンⅡキエンベ”その人である。

しかし、この男…大変なドジであった。

例えば、友好国に援軍を送った筈なのに、間違っってその友好国の軍を攻撃し、友好国を滅ぼすきっかけになったり、派兵する兵士の数

を一桁間違えたり、と重大なドジを何度もやらかした。

だが、彼には悪運とハイヒューマン故の高い能力があった。

そのため、友好国を攻撃した時はその友好国の敵対国と良好な関係を築けるようにまで持っていていたし、派兵人数を間違えた時は敵の援軍や伏兵などの罠さえも蹴散らせた。

そう、ドジをするたびに、ドジを挽回するほどの功績をあげたのだ。

これだけで終われば希代の戦略家として、後世に名を残しただろう。しかし、彼は日常でも風車に挑むドン・キホーテのように喜劇を振り撒いた。

何時しか、そのモーチュンのドジっぷりは周辺諸国にまで知れ渡り、キエンベ王国は何をするかわからない国であるため、関わらない方が無難である。という共通認識が生まれるに至る。

それ故に、キエンベ王国は小国ながらも、マヤト皇国による呼びかけにより行われた大陸和平会議まで大陸の乱世を生き残れたのだ。そうして、内乱は終わりを迎え何時しか大陸を外見上とは言え、和平に導いた各王国の祖達は救世七英雄と呼ばれるようになった。

その救世七英雄の中でも一際、異彩を放つ“モーチュンⅡキエンベ”は、そのキャラクターからくる愛着故に失笑英雄や喜劇王などといった愛称で呼ばれ、彼の数々の逸話は大陸各地に笑顔を咲かせる事になったのであった。

めでたし、めでたし。

とは行かないのが世の常である。

大陸平定当時のキエンベは、その立地条件から酷く潤った。
北はマルゲン、東はマヤト、西はエンデュアル。

そう：小国ながら交易の要衝となったのだ。

それに伴い周辺諸国との軋轢なども少しずつ生まれ、疎遠だった外交も多く行われるようになった。

だが、その時にはあまりにもモーチュンの喜劇が有名になりすぎており、多くのキエンベ人は何処に行っても馬鹿にされるようになっていた。

「この前、美女と間違えて便所にキスしたんですけど…」

「ちよっ。おまっ。

それ何処の喜劇王だよっ？」

「へえ、あんたキエンベ出身なんだ…
じゃあ、アレやってよアレ！」

「はあ…わかったよ…

見よっ…これぞっ！

モーチュンが奥義っ！

キーエンベ…ボンバー！！！！」

そう…まるで湖畔で戯れる白鳥のように美しいポーズをとって…

ズウビシッ!!

「「「お…お前…いったい何を!?!」」」

「ふっ…お前達と俺はすでにドジっている…」

アボ〜ン!

「ペプシッ!」

「ブタペストッ!」

「ナイアガラッ!」

……きつと、それは酒に酔った上での悪ふざけの一言や、軽い気持ちで話した笑い話程度であったのかもしれない。
だが、それは暗い暗い膿となりキエンベ人を苦しめた。

それ故の必然だったのか、キエンベ人は何時しか失笑英雄を否定した。

殊更に、キエンベ国内では彼の失敗は否定され、彼の成功のみが賞賛されるようになる。

やがて、彼の成功はより良い方に改竄され、失敗は覆い隠された。
そう…歴史の真実は時の彼方へ埋もれていったのだ。

しかし、その行き過ぎた自国への賞賛は、何時しかキエンベ人達に

選民思想や純潔主義といったものを、植え付ける毒となってキエンベ王国を蝕んでゆく。

特に、キエンベの統治者であったハイヒューマン達は酷かった。

確かに、ハイヒューマン達は元々から選民思想や純潔主義といった考えを持っていた。

何故なら『アルタイヤの子孫達も超人的な力を持つ』というのと『ハイヒューマンとハイヒューマンでの交配でしか、確実にハイヒューマンは生まれない』というのが大陸では周知の事実であったからである。

自分こそが選ばれた人間である。

世継ぎには確実にハイヒューマンになってもraitたい。

そう考えるのは当然であっただろう。

ただ、アルタイヤが大陸を統一する以前から、他者との血の交配は重要だと何故か信じられていたし、国の統治を経験したハイヒューマンには、ヒューマンがいなければ国は成り立たない、という事がよくわかっていたので、その思想が極端に表にでる事はそんなに多くはなかった。

しかし、キエンベのハイヒューマンは、その行き過ぎた自国への賞賛により、その考えが大幅に発露したのだ。

そうして、彼らの多くはヒューマンを省みる事なく、ただ自らの快樂のためだけに日々を過ごすようになり、キエンベ王国は次第に困窮するようになった。

もちろん、中には反旗を翻す者もいたが大規模になる事はなく、す

ぐに鎮圧され、より酷い圧政が敷かれる事で終わった。

この圧政に堪えられずに、とうとう祖国を捨てる者や獣に身を落とす者なども現れ、キエンベ王国は交易の要衝として次第に機能しなくなった。

それでも、多くのキエンベ人達は傲慢で不遜な態度をとり続け、次第に各国から敬遠されようになっていく。

そう…昔とは違った意味でキエンベ王国と関わる事を避けられ始めたのだ。

そこからは困窮したハイヒューマン達による更なる弾圧や圧政が続き、ますます国は荒廃し乱れていき、冒頭に辿り着くのだ。

――

マヤト王カグツチはキエンベの現状に相当な衝撃を受けた。

生きるために人が人を襲い、騙し、奪う。

そこに協力や思いやりなどは一切なく、この世の地獄が広がっていた。

その中でもカグツチをどうしようもなく憤慨させたのは、まるで、ヒューマンを玩具のように弄び捨てる、この地の統治者の在り方だった。

それはヒューマンと共に歩んできた彼…いや…マヤト皇国にとって、まさに許しがたい所業であった。

故にカグツチはマヤトに帰りキエンベの現状を広めた上で、一つの提案をした。

キエンベの民を解放する：と。

幸いな事に助けを求めて来た青年はキエンベの王子であつたし、国内でもキエンベの民に同情する者が多くいた。

そして、周辺諸国も賊を生み出す厄介な土地に成り下がっていた、キエンベ王国をマヤト皇国が平定してくれるのなら助かる。としてマヤト皇国の動きを容認した。

こうして、マヤト皇国はキエンベ王国の王族からの支援要請、自国の民の賛同、周辺諸国の理解などを得てキエンベ王国の平定に乗り出したのだつた。

だが、平定には多くの困難が伴つた。

マヤト皇国がキエンベ王国の統治者達に、どれだけ平和的にマヤトの理を唱えようとも彼らは決して納得はしなかった。それどころか攻撃を加えて来たのだ。

それはそうである。例えば王子が自国への介入を許したとしても、結局の所それはキエンベの総意ではないし、その王子も五年ほど前に行方不明になっていた王子だったからだ。

きつと、彼らの目にはマヤト人は自分達の利を奪う侵略者にしか見えなかったのだ。

そのため、マヤトとキエンベの間で争いが起こつた。

確かにキエンベ側もハイヒューマン——特に純血主義からくる近親相姦により生まれた者が多かったため、多くのスキルを受け継いだ者がおり強かつた。また、その弊害か精神的疾患を抱えている者も

多かった。――や☆品を有していたので、苦戦もした。が：地力の差はいかんともしがたく、結局はマヤト側の勝利で終わった。

だが、真の困難は此処からであった。

キエンベの民も伊達に何百年もの間、この土地で過ごしてきた訳ではない。

彼らも当然のようにキエンベ独特の純血主義や選民思想に染まっていたのだ。

それに加え、その劣悪な環境で生きるために培ってきた超個人主義とでもいべき思想も持っていた。

そのため、彼らは弱者を虐げる事や何かを奪い自らの利益とすることに躊躇というものがなかった。

協力することや恩を受けたら恩を返すといった事を美德とする、マヤトの思想とは正反対であり、キエンベの民にマヤトの思想を植え付けるのは困難を極めた。

いや：そもそも彼らはまともな教育というものを受けていなかったのも、マヤト人達の言葉の意味を正確に理解していたのかも怪しい。

だからだろうか？キエンベの地に入植したマヤト人がキエンベ人に何かを与えたり教えたりしても、自らの利益を優先することが多かった。

そこで、マヤト人はキエンベ人達に高圧的――といっても親が子を叱りつける時のような感じだった。もちろん中には行き過ぎて傲慢な者などもいた。――に接するようになった。

そうして、上下関係をはっきりさせればキエンベ人達が従ってくれたからだ。

だが、それはもろ刃の剣だった。

確かにその扱い方でキエンベは数十年ほどで大分潤い、民が昔の獣のような生活をするとはなくなった。

民達から凝り固まったキエンベ独特の思想はまだ抜けきっていないが、キエンベの民の中にはマヤト皇国に感謝する者もいた。

しかし、キエンベ人達はどこかでマヤト人に隔意を持つようになっていったのも確かだった。

嫉妬か？羨望か？それとも恐怖か？それは様々な感情が複雑に絡みあった想いであつたのだろう。

そして、マヤトに変化が訪れる。

ハイヒューマンといえどやはり年による衰えといったものはある。マヤト王カグツチがその衰えにより倒れ、次代のサスノオに王位が継承されたのだ。

王になったサスノオは常日頃から、『キエンベの繁栄はマヤトの民の利益を注ぎ込み、成しえた物であり、もっとマヤトの利益になるように合理的に動くべきだ』と思っていた。

そうして、反対もあつたが——特に前王カグツチの反対は凄かった。ただ、床に伏していたのとサスノオが多忙になったせいで、録に話しもできずに説得はならなかった。——サスノオはマヤト皇国にキエンベ王国を併合する事に成功した。

勘違いしないでほしいのだが、併合は至って平和的に行われた。キエンベ王国の王——マヤトに助けを求めた青年である。——を立て、王国の母体を残したままの併合であつたし、多くのキエンベ人

達はその独特の思想のせいで、キエンベの統治を任せられなかったための処置でもあったからだ。

だが、この決定に不満を持つ者がいたのは確かである。

サスノオの考えと判断は国主として、決して間違っていないのだろう…

ただ、きつと彼は何処かで過ったのだ。

その過ちが原因なのか？それとも違う原因があるのか？

いかなる理由かはわからないが、キエンベ王国はマヤト皇国を裏切り、大陸という舞台で暗躍を開始した。

そうして…遂にマヤト皇国とキエンベ王国は、再び矛を交える事となったのだ。

果たしてこの争いを誰が望んだのだろうか？

マヤト人とキエンベ人…もしかしたら、互いに手を取り合い生きて行けたのかもしれないのに…

誰もが傷つかず、誰もが幸せで、誰もが理解し合う。

そのような夢に意味などないかのように、今日もどこかで争いが起こっている。

そう…虚しくとも世界は続いて行く。

だが、世界が続いて行く過程で膨大な時間も流れるのだ。

マヤト人とキエンベ人…

いつか…誰かが望んだように手を取り合える可能性は零ではない。

残酷な現実だが、それが唯一の救いなのかもしれない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288w/>

奇運なる農耕民族A

2011年10月18日23時52分発行